

「明治六年一月七日令して六月八日より三十日まで、始めて官員に暑中休暇を与う。後に八月に改む」とある。

(102) 岡田前掲書注(26) 一一〇——一一一ページ。

(103) ケプラーの先輩の大観測家ティコ・ブラーエ(一五四六—一六〇一)は終生錬金術者であったが、「占星術については晩年になってから以前からもっていた多くの考えをすてることになった。それは同じ瞬間に生まれたふたりの男または女が、一生同じ運命をうけることがほとんどないということ」「そこで、ひとりひとりの男たち・女たちの一生についての占星術の予言は信用できない。」(武谷前掲書注(2) 三三ページ。)

日本の渋川春海は、もちろん「天文」をも担当している。

(104) 内田正男「こよみの系譜」前掲注(3) 所収 二八ページ。

(105) 石井前掲書注(87) 六五五ページ。

(106) 近代の改元については、松島栄一「近代天皇制における元号問題」前掲注(8) 所収、「一世一元の年号について」「元号問題の本質」(白石書店 一九七九) 荒川久寿男「明治改元と維新の大精神」『元号——いま問われているもの』(日本教文社 一九七七) 所前掲書注(12)。大森前掲書注(35) など。

(107) 井上清「年号制廃止論」(一九五〇・二「天皇制」東京大学出版会 一九五三) 一九〇ページ。

(108) 同前。

(109) 井上清「歴史的視点から元号制を排す」一九七五 前掲注(8) 所収 二二六ページ。

## 謝 辞

「元号賛成派の法制化反対論」を一九七九年二月九日付の「神戸新聞」(のち『矩形の銃眼』大和書房 一九八一)に発表されて、小論文作成のヒントを与えて下さった、歴史家色川大吉氏に感謝いたします。

最後に、本稿を、戦争で伴侶をなくされた今はなきマリア・村尾順子氏に捧げます。

(一九八二年四月二二日)

\*注(48) への補注 橋本万平『計測の文化史』(朝日新聞社一九八二)「国の政治が一日空白」(二一八ページ)。日蝕の予測ができた

からにはその理由もわかっていたのに、この現象を不吉としたのは不合理だ、ともある(同)。

\*注(69) への補注 一月一日の寅刻(午前四時頃)に天皇が属星(北斗七星をその人の生年に配して信仰する星)を唱え、天地四方と山陵を拝して息災を祈る「四方拝」の呪文に「急々如律令」が登場する。六四二(皇極天皇元)年八月一日の記事をはじめとし(『公事根源』の説)、中国の風にならって奈良時代から行われたともいわれているが、九世紀から年首の恒例の儀式となった。明治になると、属星をやめて伊勢神宮や天神地祇などの拝に改められ、新年節(四大節の一つ)という国家的祝祭日となり、一九四八年からは「国民の祝日」の一つ(元日)となっている。

\*\*\*注(96) への補注 一八七四(明治七)年七月廿五日の太政官達に「締盟各国君主ノ称号、原語各種有之候処、和公文ニハ原語ニ拘ハラズ總テ皇帝ト可レ称定式ニ候条、此旨可ニ相心得ニ事。但シ共和政治……ノ如キハ大統領ト称スベキ事」とある。これには、イギリス公使パークスの「日本人には攘夷論いらいの外人蔑視があり、日本こそ帝國、イギリスなどは王国などと見下す傾向がある」との抗議が背景にあった。(准陰生「Queen」の訳語が「皇帝」であった話)『読書こぼればなし』岩波書店 一九七八・二二—二一三ページ。

太政官達が七月廿五日で、翌年一月まで少し間があるが、こうした事情も関係しているのかもしれない。

(七月二十五日 追記)

- (77) 向井元升『知恥篇』(明暦元(一六五五)年成) 前注よりの重引。
- (78) 当時のイエズス会神学校で使われていたテキストにもとづいて作成された天文書が一部だけ現存している。その書『二儀略説』(『近世科学思想』下)『日本思想大系63 岩波書店 一九七二 四三ページ』では、太陽暦が「太陽ノ巡環ニ随」った「追節ノ暦」として紹介されていたり、日月食の説明がある。
- (79) 渡辺敏夫『日本の暦』(雄山閣 一九七六)  
同書は巻頭に多くの暦の写真をのせている。太陽暦の版行について大いに学ばせていただいた。
- (80) 「洋書の輸入を解禁した」という伝説については、加藤文三『学問の花ひらいて』(新日本出版社 一九七二 一三七―一四二ページ) 参照。
- (81) 広瀬前掲書注(4) 一三二―一三三ページ。
- (82) 中山前掲書注(5) 七四ページ。
- (83) 佐藤政次『日本暦学史』(駿河台出版社 一九六六)
- (84) 『日本科学技術史大系14』(第一法規 一九六五) 三一―三二ページ。
- (85) 外務省編『日本外交年表並主要文書(一八四〇―一九四五)』(原書房 一九六五) によって、幕府が結んだ「日米和親条約」をみると、そのはじめに  
安政元年(嘉永七年) 甲寅三月三日(西暦千八百五十四年第三月三十日) 於神奈川調印  
安政二年乙卯正月五日(西暦千八百五十五年第二月二十一日) 於下田批准書交換  
とあり、「嘉永七年三月三日 千八百五十四年三月三十日 全権者氏名・花押」で結んである。(同書上巻 一一二ページ)
- (86) 前掲書注(84) 二八―三二ページ。
- (87) 石井研堂『明治事物起原』(春陽堂 一九二六) 六五四ページ。  
長崎済美館教授柴川大介(方庵)の慶応三年の日記には「毎日洋暦の月日と七曜を配して注記」してある。
- (88) 数内前掲書注(8) 二二―二三ページ。
- (89) 同前。二二ページ。
- (90) サトクリッフ父子(市場泰男訳)『エピソード科学史IV』(社会

- 思想社 一九七二) 一九九―二〇五ページ。
- (91) イギリスの例を除いて、グレゴリオ暦の実施については、渡辺敏夫『こよみと天文』(恒星社 一九七〇) 一八四―一八七ページによった。ただし、同氏の『暦』(恒星社 一九三七)の一五四―一五五ページに詳細な一覧表があり、それによって一部を訂正した。
- (92) 岡田前掲書注(3) 一一―一三ページ。注(26)の三七八―三七九ページ参照。
- (93) 『日本史辞典(3訂増補)』(数研出版 一九六七) 二八三―二八五ページ。
- (94) 井上智男・時野谷勝ほか九名共著の大阪書籍の『中学社会(歴史的分野)』一九八〇年文部省検定済
- (95) 新政府の議定・松平慶永の「逸事史補」『松平春嶽全集(第一巻)』「此ノ度ヨリ年号ノ儀ハ御一代御一号ノ取り極メニナレリ。コレハ朝廷ノ御規則ハナケレドモ、清廷ノ法ヲ用イラレタルナルベシ」。所前掲書注(12) 二〇五―二〇六ページより重引。
- (96) 近代になって、天皇の称号は、「大日本帝国憲法」によって国内ではそれに固定したようにみえる。しかし対外面・外交面ではそうではない。前掲書注(85) によって調べてみよう。「(日本)天皇陛下」なる語は、明治二年九月(一八六九年一〇月)から明治八(一八七五)年一月までのごく少数の文書にある。昭和一九(一九四〇)年六月の「日本国タイ国間条約」から「大日本帝国天皇陛下」ならびに皇国が登場して、昭和二〇(一九四五)年九月の降伏文書の調印まで使われている。その間、明治八(一八七五)年五月から昭和八(一九三三)年四月の「日蘭仲裁裁判条約」までは、ただ一例の大皇帝を除くと、「(大) 日本国皇帝陛下」が一貫して使われている。
- そうすると、戦前(大日本帝国憲法下)にあっても対外的には皇帝であったといつてよからう。
- (97) この即位で、始めて唐制の服御を廃止している(行政官布告)。
- (98) 中山前掲書注(5) 一〇―一三ページなど。
- (99) 岡田前掲書注(26) 三三―三三三ページ。
- (100) 「政府部内でも秘密」。同前。三三五ページ。
- (101) 石井前掲書注(87)の六五二ページ。「暑中休暇の始」によると

みたまわずして忽に産れませり。生れましながら能く言う」

〔『日本書紀(下)』日本古典文学大系68 岩波書店 一九六五  
一七二—一七三ページ〕。

「上宮聖徳法王帝説」(前掲注(7)所収 三五九ページ)にも「厩戸に出でし時に上宮王産れます」とみえる。この部分も、日本書紀も八世紀に作られている。「上宮聖徳法王帝説」の頭注(家永三郎)には「新約聖書のイエスが産で生まれたという説話に符合する。おそらく中国をへて八世紀初めにイエス説話が伝来したのである」とのべられている。

キリスト教とともに四世紀いらいローマ帝国で定着した週の制度は、中央アジアのサマルカンドを中心としたソグドの地に入り、彼らの広い商業活動を通して中国へもキリスト教とともに伝来したのである。『御堂関白記』にはじめてのっている「蜜」(日曜日に相当)は、この「ソグド語の mir を音訳したもの」(広瀬前掲書注(4) 九四—九五ページ)で「唐代の暦にもしばしば使われている」(薮内清「東洋天文学史」『天文学の歴史』(新天文学講座12 恒星社厚生閣 一九六四 一二四ページ)。では、いつだれによって日本にもたらされたかという点、大同元(八〇六)年に空海(弘法大師)がもたらしたものである。(広瀬、同前九三—九五ページ。注(59)の三七ページ)。

なお、「全能なる神が天地を創造するのに、なぜ六日間もかかったのか」については、神忠男「中学生に知的思考の感動をあたえた」『ひと』(一〇〇号)一九八一・四参照。

(66) 所前掲書注(12) 一四五ページ。

(67) 七世紀に入ると、権威を高めるために中国の文献から借用した天皇(スメラミコト)を称号として使いだしている。しかし、天皇という称号も時に使われたが、帝・皇帝・天子・聖主・国王・国主など実に種々な呼称が用いられている。

(68) 内田正男氏による。広瀬前掲書注(59) 四九ページ。

(69) 律令は、本文でのべたような社会の共同意志の公的な表現として存在しただけではない。中国でさへ律令と一般民衆のひらきが大きく、それにもとづいて、漢代の公文書に使われた「急々如律令」が、やがて道家・陰陽家などに流れこんで呪符や護符として使われ

るようになった。こうした律令と日本の大衆とのひらきの大きさはいうまでもなく、この「急々如律令」は日本でも奈良時代(浜松市伊場遺跡出土の木簡)から護符・呪符として使われつづけてきた。そして江戸時代の歌舞伎十八番のうち「勸進帳(安宅新関の場)」で弁慶がその威力を語ってくれている。

「急々如律令と呪する時は、あらゆる五陰鬼・煩惱鬼まつた大悪魔・外道・死霊・生霊たちどころに亡ぶる事、霜に煮湯を注ぐごとく……」(『歌舞伎十八番集』日本古典文学大系 98 一九六五 一八四—一八五ページ)。

こうして中国でさえもそうであったように、護符・呪符の世界でも日本では生きのびて今日に到っている。

(70) 永原慶二「前近代の天皇」『歴史学研究』第四六七号一九七九・四

(71) 「命名のさいに選ばれた文字は、福・禄・寿にちなんだものが多い」(久保常晴『日本私年号の研究』) 所前掲書注(12) 一六八ページからの重引。

(72) 林春斎(羅山の子)『改元物語』「年号ハ天下共ニ用イルコトナレバ、武家ヨリ定ムベキコト勿論ナリ」

(73) 同前。

(74) ①承応改元(一六五二年)。「慶安四年八月十八日、今ノ大君征夷大將軍ニ任ジタマウ、此ニ由テ明年ノ秋改元アツテ、承応ト号ス」(前掲書注(72))。

②享保改元(一七一六年)。「正徳六年六月廿二日……改正徳ヲ為享保、依ニ變異也。(関東凶事)」「『続史愚抄』関東凶事つまり將軍の死去。

『年号勸文部類』「此度改元無其故」、大樹(將軍)新任之時也」

(75) なお、將軍死去による廢朝の例もある。  
「正徳六年五月……去月卅日、大樹公(徳川家継)薨去ニ付、五ヶ日廢朝ノ由也」『大江俊尚記』

「喜永六(一八五三)年七月……大樹公(徳川家慶)去廿二日薨去旨言上、依之旨今日、五ヶ日廢朝之由……」『実久卿記』

(76) 海老沢有道『南宮学統の研究(増補版)』(創文社 一九七八) 四四八ページ。

日壬子条。

- (54) 『中右記』嘉保二(一〇九五)年二月一日。『本朝世紀』康治二(一一四三)年十二月一日癸未条。

- (55) 『日本紀略』貞元二(九七七)年十二月廿五日辛巳条。

- (56) 『左経記』長元二(一〇二八)年三月一日丙申条。

- (57) 『扶桑略記』延喜十一(九一)年五月廿七日庚戌条。

- (58) 『日本紀略』治安元(一〇二二)年七月一日甲戌条と『左経記』長元元(一〇二八)年三月一日丙申条。

- (59) 内田正男氏の推計による。広瀬秀雄『日本史小百科』暦(近藤出版社 一九七八)四九ページ。

- (60) 日を招きよせることによって戦いに勝利するという昔話(「日招き八幡」など)があるが、源平にゆかりの人の名が登場している。

- (61) 内田正男『暦と日本人』(雄山閣 一九七五)一四六―一四七ページ。

- (62) 本居宣長の「もろこしの聖人、日食月食のゆえをだにえはかりしらで、わざわいとしたるもおかし」(『玉勝間』一八〇一年)はともかくとして、現代の習俗に日月食の痕跡が残っていないかと、二、三あたってみた。

大藤時彦氏は「日本では日食は、太陽が病気になるったとみなし日食のある年は凶年であるとか寒さが早く来るなどという」(『ジャポニカ』小学館 一九六九年「太陽の信仰と伝説」の項)と、現在形でのべておられる。

『定本柳田国男集』(筑摩書房)の『別巻5』(一九七二)の索引でみた限り、第十四巻の「小豆の話」(一九三九年四月)に次の箇所を見つけただけであった。「秋田県の迷信俗信」の中には、……日食月食の時に、日月に供えた小豆を三粒だけ吞んで置けば、その一年間は病気をせぬという人もあると記して居る。……日月食の際に小豆を供えるものにするということは、まだ他の地方では聞かぬことだ……」

- (63) 岡田前掲書注(25)の七四―七五ページ。なお同書の七五―八三ページにかけて、道長の祖父・九条師輔の『九条殿遺誠』などによる「平安貴族がいかに暦を利用したか」の分析がある。

朝おきると、生まれた年の星の名号をとえ、鏡をみて形体の変

化をしり、ついで暦をみてその日の吉凶と書きこんでおいだ行事予定をしる、それから洗顔をし、仏・神への礼拝をおえてから、その具注暦へ昨日の記録を書き入れる。これが終ってから朝食となっている。

- (64) 「大日本古記録」所収の索引で『御堂関白記』の日月食をリスト・アップして分類してみた。

内 容 分 類		日食	月食
① 予報があつて食あり(正現)	2	2	3
② 予報の有無は不明で食あり	1	1	1
③ 予報があつたが雨などで確認できず	2	2	3
④ 予報の暦注のみ(結果は不明)	2	2	3
⑤ 予報があつたが食なし(不正現)	1	2	2
(総 計)	8	12	12

誤報は⑤だけだが、これに④を加えると、②③がいずれも予報どおりだとしても、適中率はぐんと低くなる。

- (65) 中国(唐)へは、ネストリウス(五世紀初のコンスタンチノープルの司教)派のキリスト教が、六三五(太宗の貞観九)年にペルシヤ人阿羅本を首班とする正式の伝導団によって伝えられた。そして六三五年に布教の許可をえたあと、中国で景教とか波斯経教とかよばれたこの教えは、大流行して、七八一年には大秦景教流行中国碑が建立されている。

それまでの間に、景教(キリスト教)が日本に伝わった可能性がある。『続日本紀』をみると、七三六(天平八)年八月庚午(二三日)に入唐副使・従五位上・中臣朝臣名代らが唐人三人、波斯人一人(李密翳)を伴って拝朝し、十一月三日には彼らに位階が授けられている。

聖徳太子の出生にまつわる話が『日本書紀』推古元年夏四月庚午朔己卯条にみえる。

「(母の)皇后、懐妊開胎さんとする日に、禁中に巡行して、諸司を監察たまう。馬官に至りたまいて、乃ち厩の戸に当りて、勞

(43) 『続日本紀』宝龜三(七七二)年七月辛丑条。国司らが処罰されている。

(44) 「天平」改元とか「天平宝字」改元の由来。

(45) 『扶桑略記』は「災変あるなり」としているが、『皇年代略記』は「天変地震」によるとか「日蝕」によるとか「火事地震」によるの三説をあげている。

(46) 『令集解』では、陰陽寮が直奏するという説をあげている。

(47) 『律令』(日本思想大系3 岩波書店 一九七六)の六三一ページによると日食の場合、唐令では「其日置五鼓五兵於大杜。」とあり、日本の令にはなかった月食について「月食奏擊三鼓於所司救之。」とある。

日本で規定を欠いた月食も、予報され廃朝になったケースもある。

『御堂関日記』には、「長徳四(九九八)年十月十五日庚子」をはじめ七回の予報がのっている。この場合も未で「月蝕 大分晝既、虧初子三刻二分、加時丑三刻五分、復末寅四刻二分」とかかっている。月食のケースはないが『朝野群載』(巻第八)には「中務省請奏『日月食』」があり、応徳二(一〇八五)年と康和二(一一一〇)年の二通があがっている(前掲注(38)の二〇五―二〇七ページ)。

『長秋記』天永四(一一一三)年二月十五日には月食による廃朝がみえる。

(48) 前掲『律令』(注47)では廃務の初例として、日本紀略・延喜二(九二二)年六月乙卯条をあげている(六三一ページ)。

しかし、元慶元(八七七)年四月壬申の条に、夜食(夜丑一刻の日食)について「皇帝不視事、百官不理務」とある。実は、夜間の日食なので、中国の先例を参考にするため明経・紀伝・明法の各博士らを集めてどうするか検討している。すでに日本でも天長八(八三一)年に同じケースがあり、「陰陽寮壁書」によって奏上しなかったが、日食は国家の大忌だからそれいごは奏上しており、今回も廃朝と決定した。

「廢務」の字句は、「寛平九(八九七)年九月一日癸酉、日蝕、諸司廢務」(『日本紀略』)など多くの例が「延喜二年」以前にある。

なお「廢朝」について『日本歴史大辞典』(河出書房 一九七二 猪熊兼務氏執筆)は「天皇が政務をとらないこと。儀制令では、日蝕のときにはその日蝕の間だけ、また天皇の二等親以上・外祖父・右大臣散一位などの喪のときには一日だけ、この廢朝が行われた」とあり、『日本史辞典』(角川書店・第二版 一九七四)も「日食の間」とのべている。

そこで、「日食の間」か「一日」かを検討してみる。

① たしかに日食の予報も、元慶元年四月壬申で「虧初子三刻三分、復至寅二刻一分」と、時刻を明示してあるが、本文で後述するように適中率が悪い。

② 日食に備える大がかりな準備。

③ 日食そのものの重大さ(廢朝する理由の筆頭にあげられている)。

④ 日食は「諸司廢務」ともなり、『公事根源』などの廢務の定義をみても「一日をかぎり」と、日が単位となっている。

⑤ 役人の実態。『権記』の長保二(一〇〇〇)年三月一日戊寅、に「日蝕之日廢務例也」。『春記』の長暦四(一〇四〇)年正月一日丙辰は日食とも重なって「今日不可出仕、依廢務」とある。

⑥ 儀制令の割注に、「時を過して乃し罷れ」は「……西時には退出してもよい」とある。この規定は、唐の例からとられたのではないかと筆者は推測しているが、西は、夕暮れ・日没時にあたるから、もし勤務中に日食に遭遇した場合には(仮令日蝕在申者)と理解するのが適当だと思う。

したがって、雨のさいも正現しない場合も、予報があればすべて、その日一日は、廢朝・廢務となったと理解した方が実態にも適すると思う。(稿を改めて詳述した方がよいかもしれない)。

(49) 『日本紀略』天延三(九七五)年七月一日辛未条。

(50) 広瀬前掲書注(4) 一四〇ページ。

(51) 『大江俊矩公私雑記』

(52) 『中右記』嘉承元(一一〇六)年十二月朔日条。天永二(一一一一年)四月朔日丙子条。

(53) 皇帝の生まれついた星がよかった。『中右記』嘉承二年十一月朔

ある。

- (17) 森鷗外「元号考」『鷗外全集』第二十卷(岩波書店 一九七三) 一六五ページ。

- (18) 佐藤宗諱・前掲注(12)の九二二ページ。

- (19) 「八尋機殿・建部」の条

「難波の長柄の豊崎の宮に御宇しめしし天皇の丙午のとし」

『風土記』日本古典文学大系2・岩波書店 一九五八年 四三九ページ

- (20) 「香島郡」の条

「難波の長柄の豊長の王朝に馭宇しめしし天皇のみ世、己酉の年」(前注(19) 六五ページ)

- (21) 『続日本紀』天平宝字元年十二月壬子条。

- (22) 同前。神龜元年冬十月丁亥朔の「詔報」。

- (23) 『類聚三代格(卷二)』天平九年三月十日太政官謹奏。

- (24) 前掲書。注(12) 六二二ページ。

- (25) 『日本後紀』弘仁元年九月丙辰条。

(26) 京都府宇治市に宇治橋の建設の由来を記した石碑の断片(宇治橋断碑)がある。「もしこの碑文が確かに大化二年に建立されたものであるならば、この断碑は大化という年号が実際に存在し、都から遠からぬ畿内で使用された最も確実な証拠となるのであるが、すでに数田嘉一郎氏が遺登なる僧侶の伝説をめぐって詳細な考証の結果、この碑文が平安初期を遡りえないことを指摘している。してみると大化の実存性を主張する史料はひとり『日本書紀』のみといえる」(岡田芳朗『日本の暦』木耳社 一九七二年 九一九二ページ)。なお「大化」につぐ「白雉」の存在も疑わしい。

- (27) 川口謙二・池田政弘『元号事典』(東京美術出版 一九七七) 七ページ。

- (28) 同前。七七八ページ。

(29) 後花園(在位二四二八—六四)の永享・嘉吉・文安・宝徳・享徳・康正・長祿・寛正。後醍醐(在位一三一八—三九)の元応・元享・正中・嘉暦・元徳・元弘・建武・延元。四条(在位一二三二—四一)の天福・文暦・嘉禎・暦仁・延応・仁治。ほかに、一条・崇徳・後堀河・孝明の各天皇が六回となっている。

- (30) 佐藤前掲書注(12) 七六ページ。

- (31) 八七七年度の「元慶」改元を最後として、祥瑞改元はなくなる。前注書七七七ページ。

- (32) 同前。七八二ページ。

- (33) 同前。七八二ページ。

- (34) 瀧川前掲書注(16) 八九—九〇ページ。

(35) これらの書籍だけで、年号の出典の過半数をこえている。上地龍典『元号問題』(教育社 一九七九) 六〇ページ。大森和夫『元号——昭和のあと』はどうなる(長崎出版 一九七六) 三一ページ。

- (36) 瀧川前掲書注(16) 一〇三—一〇四ページ。「元号字抄」『続群書類聚(公事部)』によって、寿永のはか元永・建永・康永・貞永・嘉元があげられている。

- (37) 『続日本紀』慶雲元(七〇四)年五月甲午条など。

(38) 『扶桑略記』と『二代要記』は、「金」ではなく「白銀」が貢獻されたと伝えている。しかし、日本ではじめての銀は、六七四(天武三)年に同じ対馬からすでに貢上されている(『日本書紀』同年三月丙辰条)。そのうえ二二日の改元の直前(一五五)には陸奥へ金精鍊のために人を派遣している。だから、どうしてもここは金でなければならない。

なお対馬の銀については、調として指定されている(『延喜式』卷第二十四主計上)。

一世紀中頃の「対馬貢銀記」「朝野群載」に次の記事がある。

「島中珍貨充溢。白銀鉛錫・真珠金漆之類。長為朝貢。」(『新訂増補』国史大系29上) 吉川弘文館 一九六四 六五二ページ。

「金漆」(漆の一種)の方がありえそうだが、もし金と漆となれば、時代がぐんと下がっているが、金を産出する可能性もあるかもしれない。

- (39) 『続日本紀』大宝元年八月丁未条。

- (40) 『続日本紀』天平廿一年二月丁巳条と天平勝宝元年夏四月甲午朔条による。

- (41) 所前掲書注(12) 一〇〇ページ。

- (42) 同前。

えてはじめて存在するものとし、一個人の生存時間をもって時間をはかる基準とする／＼という思想は、古代の専制君主にはふさわしいだけ、現代の民主主義（国民主権）には似つかわしくない。そこで、日本国憲法に反する一切の法律が無効を宣せられたように、元号に関することがらは皇室典範から削除されることとなった。

一九五〇（昭和二五）年には、参議院で「元号廃止」が審議されたこともあったが、「昭和」という年号は、法的根拠を欠いたまま慣習として存続してきた。

では、現在はどうなっているのか。

一九七九（昭和五四）年六月に、多くの問題点が指摘されながら「元号法」が成立した。その短かい法律によると「元号は政令で定め、皇位の継承があつた場合に限り改める」とし、付則で、「昭和」をこれによって定められたものとする、としている。

古代中国でうまれた元号（年号）制は、日本でだけ生きのびてきた。国際的な交流と相互理解をますます深めていかなければならない今日、内閣が決定し使用を義務づけるはずの元号は、世界の人々からも歓迎され祝福されるものとなるであろうか。

# （注）

- （1）藤堂明保『漢字と文化』（徳間書店一九七〇）二〇六―二二四ページ。
- （2）武谷三男『科学入門』（勁草書房一九七〇）六二ページ
- （3）岡田芳朗「原始から現代まで世界の暦」『日本の暦大図鑑』（新人物往来社一九七八）一〇六ページ。

（4）広瀬秀雄『日本人の天文観』（日本放送出版協会 一九七二）二〇五ページ。

（5）中山茂『日本の天文学』（岩波書店 一九七二）四二二ページ。

（6）藤堂明保『漢字文化圏の形成』（岩波講座・世界歴史6）（一九七二）一〇一―一〇二ページ。

（7）千支・月名をどのように読んだのか。「上宮聖徳法王帝説」『聖徳太子集』（日本思想大系2・岩波書店 一九七五）の補注（家永三郎・築島裕）の四一四ページによると、大約つぎの通りである。十千についての和訓（キノエ・キノト・ヒノエ・ヒノト・ツチノエ・ツチノト・カノエ・カノト・ミヅノエ・ミヅノト）の初見は、延喜（九〇―一九二三）頃の『兼輔集』である。それゆえ、音読したものと推定。

十二支については、万葉集・正倉院文書から和訓の可能性もあるが、十千が音読なら十二支の方も音読が妥当。

月名についても、平安初期以前の古訓点には和訓の例がなく、日次の日付も院政期以前には例がない。

（8）数内清「紀元制の歴史」『元号を考える』（現代評論社 一九七七）一〇ページ。

（9）正朔については古来諸説がある。ここでは、広瀬秀雄「こよみと人間の文化史」前掲注（3）所収の二四ページによった。

（10）藤堂明保「中国の元号」前掲書（8）所収の三六―三七ページ。（11）前注と同じ。

（12）佐藤宗諱「古代日本の元号」（前掲注（8）所収）では、藤田至善氏の「元鼎三年」をとっておられる（九四ページ）。所収『日本の年号』（雄山閣 一九七七）では、津田左右吉氏の藤田説の検討などをおして「元鼎四年」以降とされている（二〇―二二ページ）。ここでは元鼎四年をとった。

（13）『日本書紀』欽明天皇十四年六月。

（14）前注。欽明天皇十五年二月。

（15）前注。推古天皇十年冬十月。

（16）震生『歴代建元考』（一九二九年稿）をひきながら、瀧川政次郎『元号考証』（永田書房 一九七四）の一一八―一九ページと所功（前掲注（12）の二六―二八ページ）では、整理の仕方に差異が

があとをつぎ(踐祚)、同日の午後五時すぎに枢密院をへて、『周易』からとった「大正」の年号を決定した。しかし、実は天皇の病氣回復は不能との診断がでた二八日から、新年号の選考は政治の最重要課題となっており、先帝の死後準備されていた政府案が午前中の枢密院の審議委員会に提出され、午後の枢密院会議をへて決定のはこびとなった。そして直ちに「明治四十五年七月三十日以後ヲ改メテ大正元年ト為ス」との詔書を出して、官庁でこの年号を使うように命じた。そこで二九日まで「明治」、三〇日いは「大正」と一年に二つの年号を使うこととなった。なお、天皇の贈り名を元号と同じにすることもここから始まったが、これも中国(明・清)の例にならったものだろう。

明治の年号は、これまでの例にはなく長い四五年にわたるものとなった。しかし、天皇の在位は慶応三(一八六七)年正月から始まっており、翌年九月の改元でこの年の一月一日にさかのぼって明治としたのだから、一世一号ではなかった。近代になつて始めて導入された一世一号の最初は、大正である。

大正天皇は一九二六(大正一五)年十二月二五日午前一時すぎに死亡。直ちに皇太子が皇位をついで年号の選定をまず命じた。かねて用意の原案から閣議をへて政府案を作り、枢密院会議をへて、『書経(尚書)』からとった「昭和」と決定した。新天皇の統治のはじまった昭和元年は二五日いごの七日間だけとなった。

大日本帝国憲法(明治憲法)のもとで、天皇は「国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬」することになっていた。そこで天皇在位の称号ともなった元号(年号)を、踐祚の開始と終了(死の瞬

間)に合わせるために大きな努力が払われていた。しかし、唯一の主権者である者の死によって一つの時代が完結するVという考えを忠実に実行しようとすれば、死亡当日をどちらの統治に数えるのかといった「深刻な」問題をたえずひき起こすこととなった。

それはともかく、一般の人々も長らくなれ親しんでいた干支に加えて次第に年号も使うようになり、「一九世紀末には都市民の間で、二〇世紀にはいつてしだいに農村部にも普及していた」<sup>(107)</sup>。それには、明治という年号が長らくつづいたことや、近代になつて個人が役所等の書類に接する機会が生まれたということがある。そのうえに「国民教育のめざましい普及と天皇制教育の滲透がくわり、新聞雑誌などの定期刊行物の普及が決定的な役割を演じた」<sup>(108)</sup>と考えられている。

こうして古代中国の専制君主が考えた八皇帝が時間をも支配するVという政治思想が、近代の日本に定着することとなり、人間の存在を皇帝の存在と無意識のうちに結びつけるようになっていった。<sup>(109)</sup>古代専制君主の理念が実を結んだ、ともいえよう。

\* \* \*

第二次世界大戦による敗北のなから生まれてた日本国憲法は、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義(戦争放棄)を宣言している。

「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」とかわった天皇は、国政に関する権能はもたず、憲法第七条に定められている国事行為のみを、内閣の助言と承認のもとづいて行うこととなっている。

人間の存在の根幹にかかわる時間を八特定の個人が人々に与



やが、とてもおよばねばやはり徳川の正月がいい<sup>(104)</sup>」  
 そのほか「ヤソの正月を採用されし」と疑惑する者や、「今  
 じゃ三十日<sup>みそか</sup>に月がでる」と嘆くものもいた<sup>(105)</sup>。

こういうわけで、新政府に反対する士族の反乱や農民一揆に  
 新暦反対が登場することとなった。そこで政府の方でも、暦に  
 は太陽暦だけでなく陰陽暦もあわせてのせることにした。こう  
 すると旧暦を使っていたまでも新暦が普及しないことにな  
 った。そこで政府内部でもようやく新暦だけにすると意見  
 の一致をみても、△それでは暦が売れない▽と頒暦業者が陳情  
 したこともあって、一九一〇(明治四三)年に太陰暦日を月齡  
 に改めてようやく新暦だけのものとなった。(なお、暦の製  
 作・販売には第二次大戦後まで政府の許可が必要であった。た  
 だ新暦の準備ができなかった明治六年度だけは例外で民間での  
 コピーを許している)。

この間、民間では福沢諭吉(『改暦弁』)らが精力的に新暦  
 の啓蒙活動を行っていた。文明開化の代表的啓蒙家である福沢  
 が、太陽暦の簡便さや改暦の利益と必要さをといた同書は偽版  
 まででるほどの人気をあつめた。

# 〔問題 15〕

天皇の死後は皇太子が跡をつぐことになっている。そこ  
 で、次の新しい天皇は△明治という年号を廃して大正とい  
 う年号にかえる▽との命令を役人に出した。

では、△明治天皇の死後、どのくらいたってから大正と  
 という年号を使い▽と書いてあったと思うか。

予想

ア、明治天皇の死亡した当日もしくは翌日から。  
 イ、死後一週間してから。  
 ウ、死後二ヵ月近くたってから。  
 エ、死後一年たってから。  
 オ、死去の年の翌年の正月から。  
 カ、その他(詔書が出たその日から)。

太陽暦(グレゴリオ暦)の採用と年号制とは、一応別個の問  
 題である。

一八六七(慶応三)年正月に、父孝明帝のあとをついだ皇太  
 子は、政治の激動のなかで翌年八月二十七日にようやく即位にこ  
 ぎつけ、九月七日の夜、学者たちが提出し高官らを選び出した  
 年号のなかからクジで(神意をきいて)「明治」と決定した。  
 五経の一つ(『易経』)からとったこの年号は、翌日の「改元  
 詔書」と行政官布告第一号で公布された。そのなかに中国にな  
 らった一代一号(一世一元)が明記されていた。この制度は、  
 「大日本帝国憲法」と同時に発布された「皇室典範」(一八八  
 九年)と、それを補足した「登極令」(一九〇九年)にうけつ  
 がれていった。登極令には「天皇踐祚<sup>せんそ</sup>ノ後、直ニ元号ヲ改ム。  
 元号ハ枢密院顧問ニ諮詢<sup>しじゆん</sup>シタル後、之ヲ勅定……詔書ヲ以テ之  
 ヲ公布スル」とあった。

「直ニ<sup>ただち</sup>」というのは、これまで慣行として主に行われてきた  
 踰年改元(王位についた翌年の改元)とくいちがうし、死の瞬  
 間が同時に新しい年号の始まりとならねばならないといった問  
 題をはらむものであった。では、実際にはどうなったのか<sup>(106)</sup>。

明治天皇が七月三十日午前一時四三分に死去すると、皇太子

- ⑤ 官吏の給料を値切るため。
- ⑥ これまで特定の者に与えてきた暦販売の特権をとりけして、四民平等をつらぬくため。

大隈重信からの聞き書きである『大隈伯昔日譚』(一八九五年)などによると、いずれも○である(ただし⑥は少し問題がある)。

明治政府の収入は大部分が地租で、増収の見込みがないのに支出はふえる一方であったから、財政問題は新政府の頭痛の種であった。そこで十月ごろに大隈が改暦を考えて文部卿を通じて天文局の専門家に改暦の具体案の調査を命じている。というのも、その年の十二月三日が太陽暦(グレゴリオ暦)では新年になっており、翌年は閏月のある年にあたっていた。もしこのままいけば、来年は月給を一三カ月分支払わねばならなかった。そこで急拠十一月九日に改暦を公表し、二七日の太政官布達で「当十二月之分は、朔日二日、右兩日分の月給は下されず」と通告した。こうして政府は明治五年十二月分と翌年の閏月分、あわせて二カ月分の財源を節約することができた。

これにつぐ改暦の目的は、休暇日をへらし政務の渋滞を掃すること置かれていた。その頃は一・六の日を休暇にあてていたので、月六回・年七十二回の休暇があり、そのうえに五節句・寒暑の長い休みなどを加えると、年百数十日にのぼった。(日曜休日となると年五二日、土曜の半ドンをいれても従来の半分以下となる)。

こうして休日をへらし、日の吉凶や方角などの迷信を暦から追放して、政務処理の向上をねらったものであった。

奈良時代いご政府がつくった暦を、いつごろから大衆が使いだしたのかを推定するのはむずかしいが、平安時代も終りごろになると仮名暦がつくられている。一四世紀に入ると地方武士の需要にこたえて暦が印刷されだしている。こうした暦の印刷出版が本格化するのには安土桃山時代からで、高かまってきた庶民の要求にこたえるためのものであったようだし、各地方で様々な暦が幕府の統制下で作られている。こうした暦には実に多様な注釈(暦注)がつけられていて人々の生活の指針となっていた。

十一月になって暦が発売されて、はじめて人々は、翌年の総日数や月数、とりわけ各月が二九日(小)か三〇日(大)かを知ることができた。江戸時代には、毎月の晦日払い(みそか)か盆暮れ二回の節季払いであったから、とくに月の大小には関心を払い、月の大小だけがわかる暦が発行されるほどであった。

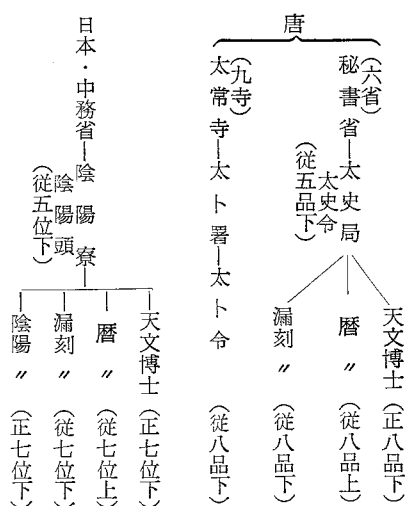
明治の新政府が、来年度の暦の発売もすでに始まった十一月九日に新暦の採用を決定し「十二月三日を、翌年の正月とする」と宣言したとき、人々はどう思ったのだろうか。

東京の銭湯での老婆の話しを当時の新聞が次のように伝えている。

「八今年(しわす)はマア怪しかる年にて……師走の三日に正月が来るとやらしい。かかること此年におよびぬれども、これまで一度も出合(い)し事なし」といって嘆くを、かたわらより八されば昨日は師走の朔日(ついたち)にて、あすは天朝の一月一日じゃという。しかれば一日に三十日はたらきをせねばならぬわけじ

漏刻とは時刻をあつかい、太卜とは占卜方術を扱っていた。天文とは、火星や金星の運行を観測し、惑星どおしの接近とか流星や彗星の出現とかの異常現象をすばやくとらえて、中国をふくめた過去の事例をしらべあげ、地上にひきおこされる吉凶を判断して、天皇に密奏するのが仕事であった。

そこでこれらの分野について、中国(唐)と日本との比較をすると次のようになる。



中国やそれにならった朝鮮では、天文・曆・漏刻など近代天文学に近い分野を太史局が扱い、純然たる占いは別の役所の所轄になっている。これに対して、日本では両者を一括し陰陽で代表させて陰陽頭(從五位下で殿上人)に担当させることにし、各博士の役割を重視している。そして、中国では「正朔を告げる」資料をつくった曆博士の位階が高いのに、日本ではそれを陰陽博士がうわまわっており、陰陽寮にふさわしく「占いが科学に優先」(98)していた。政治における祭祀の比重が高い日本で、

中国の文化との圧倒的な差をうめるために、渡来してきた技術者たちに頼りながらうち出されたのが、陰陽寮の新設であったのだろう。こうした事情が日本の曆(天文学)に古い要素を色こく残させる原因ともなっていた。

#### 〔問題 14〕

明治五(一八七二)年十一月九日に新政府は改曆を布告し、その年の十二月三日を明治六(一八七三)年一月一日とした。これは、西曆の曆日と国家神道の祝祭日とを軸にした太陽曆の採用であり、一日二四時間制の導入でもあった。

ちょうどその頃、岩倉具視、大久保利通・木戸孝允ら明治政府の首脳は、欧米諸国を歴訪中であり、留守政府の参議大隈重信が文部卿大木喬任に命じて太陽曆への切りかえを実行したものである。

では、政府の間でも改曆の事情をよく知らさないで、太陽曆採用を急いだのはどうだろうか。次にあげた項目について、太陽曆を採用する理由となったと思うものに○、どちらともいえないものに△、理由とはなかったものに×をつけよ。

#### (改曆の理由)

- ① 欧米との外交・通商などをスムーズにするため。
- ② 一年間の日数をほぼ一定させて、社会生活全体を円滑にするため。
- ③ 一年間の休日を含めこれまでの半分以上に減らすため。
- ④ 日の吉凶などの迷信を一掃するため。

△作業の感想▽

大化の改新(たいか六四五―六五〇)・大宝律令(だいはう七〇―一七〇四)・天平文化(てんぴよう・てんぴよう七二九―七四九)・天保の改革(てんぽう一八三〇―四四)・元禄文化(げんろく一六八八―一七〇四)・応仁の乱(おうにん一四六七―六九)・安政の大獄(あんせい一八五四―六〇)・享保の改革(きようほう一七一六―三六)・和同開珎(わどうわどう七〇八―七一五)・承久の乱(じようきゆう一二一九―二二)・建武の新政(けんむ一三三四―三八)・寛政の改革(かんせい一七八九―一八〇二)・慶安の御触書(けいあん一六四八―五二)

以上のほかに、中学校のテキストは次のような事項をあげている。

延暦寺・化政文化・弘安の役・正長一揆・大正デモクラシー・文禄の役・明治維新。

\* \* \*

日本の歴史上、「昭和」と「明治」を除いて一番長く使われた年号は、三四年間の応永(一三九四―一四二八)である。古代律令国家の黄金時代にあたる天平という年号を、それに続いて使われた天平感宝・天平勝宝・天平宝字・天平神護まで通算してみると、三八年間となり、聖武・孝謙・淳仁・称徳と四

代の天皇によって使われたことになる。

ところで、明治帝の前の天皇は父の孝明帝で、在位二〇年(一八四六―六六)の間に、弘化をひきついでから嘉永・安政・万延・文久・元治・慶応と六度も改元が行われた。これでは時間の尺度がくるい社会不安を増幅させるだけだから、当時の人々は、普通なれ親しんでいて狂いのない干支を使っていた。「人生わずか五十年」とすればおつりがくるし、人を見れば年かっこうもわかるから、時には十二支だけで十分だった。(徳川幕府の公文書でさえ干支だけのものが少なくない)。

そのうえ△政治の問題は、政治の建て直しにまつのが本来であって、年号の改元によっては解決されるはずがない▽ということかなり前からあった主張も力をましてきた。

そこで、祥瑞や災異あるいは年のめぐりあわせなどを理由とする改元をやめ、中国(清)の制度にならって、天皇一代の間は元号を一つに限るという一世一号の制が採用されることになった。明治天皇の即位二年目の一八六八(慶応四)年に「明治」に改元されるとともに「一世一元」がはじめて決定された。祥瑞などに左右されることなく△皇帝が時をも支配する▽という年号制の政治的意義をすつきりと宣言するものであった。

本家である中国では、五〇〇年前の一三六八年に明の太祖が「洪武」と改元していろいろ清が滅亡する一九一二(宣統四)年まで、一世一元の制度は王朝をこえて存続してきていた。日本での採用が五〇〇年ほどおくれた原因の一つは、暦学など今日の天文学を中国から導入した当初からの事情にあった。

当時の天文学者は、天文・暦・漏刻・太卜(陰陽)などの仕事を担当した。暦とは計算にもとづく暦の作成のことであり、

は、日本（陰陽暦）とイギリス・フランス・オランダ・アメリカ（グレゴリオ暦）とロシア（ユリウス暦）との三つの暦の日付と曜日などの対照表がのせられている。日月火水……の七曜は三つとも同じであって、日本では一六八四年の貞享暦らしい復活したものである）。

ヨーロッパの植民地では本国の改暦にもなってグレゴリオ暦を採用したが、独立国では、日本が一八七三年、朝鮮が一八九四年、中国では中華民国が成立した一九一二年、そしてマホメット教暦を使っていたトルコでは一九二七年から使われだしている。<sup>(91)</sup>そこで、季節にあわせた簡便で正確なグレゴリオ暦が、今では宗派宗教をとわず国際暦として広く使われることとなっている。

もっとも、この暦法にも欠点がないわけではない。その主なものは、「一、各月の日数が一定でない 二、年の前半後半・四季などの日数が一致しない 三、毎年曜日が移動する 四、新年の位置に何の意味もない」<sup>(92)</sup>である。そこで第一次大戦後の国際連盟らしい、世界共通暦の作成と採用が課題となっている。

# 《作業》

六四五年の「大化」から一八六八年の「明治」まで、およそ一二〇〇年余りの間に、二五〇ほどの年号が政府の手で制定されてきた。

高校生用のある日本史辞典は、<sup>(93)</sup>全体の三四％にあたる六〇の年号を記憶すべきものとしてあげている。手もとにある『中学

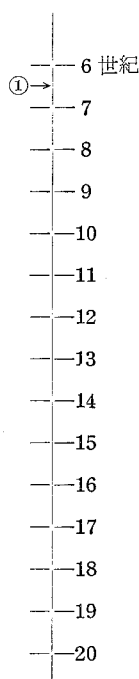
校・歴史的分野』<sup>(94)</sup>という教科書の「事項さくいん」をみると、年号をふくんだ歴史用語が二〇でている。（これらはもちろん六〇のなかに含まれている。）この二〇のなかから一三をとりだしてみた。これは「高校生の記憶すべき数」の約五分の一で、全体のおよそ五％にあたっている。

## （年号群）

①大化 ②大宝 ③天平 ④天保 ⑤元禄 ⑥応仁 ⑦安政  
⑧享保 ⑨和銅 ⑩承久 ⑪建武 ⑫寛政 ⑬慶安

A、①～⑬の年号によりみ方のふりがなをつけてから、年代の古い順にならべてみよう。

B、それぞれの年号が何世紀のものかわかるように左の年表に書きこんでみよう。



C、最後に、A・Bそれぞれの全問正解者が、何％ぐらいいるか予想してみよう。

- ア、全員ができる（正解者が90％以上）  
イ、ほとんどの人ができる。（70％）  
ウ、半分ぐらいの人ができる。（50％）  
エ、ほとんどの人がまちがえる（30％）  
オ、全員まちがえる。（10％以下）  
Aの予想（ ）。（Bの予想）（ ）。

暦の上の春分(三月二一日)と実際のとの差が一〇日以上にもな  
ってしまっていた。

ヨーロッパには改暦という慣習はなく、天命という政治思想  
もなかったが、ローマ教皇グレゴリオ十三世は、一五八二年に  
なると勅令をだして現行の太陽暦(グレゴリオ暦)を制定し  
た。その内容は、暦から一〇日分をけずって一五八二年一〇月  
五日を一〇月一五日とすること、閏年を四〇〇年につき三回だ  
けやめて平年とすること、であった。これによってグレゴリオ  
暦は、一万年について三日しかくるわなないという正確な暦とな  
っている。

# 〔問題 13〕

ローマ教皇が一五八二年の勅令によって現行の太陽暦  
(グレゴリオ暦)を制定した。この暦法に対して、ヨーロ  
ッパのプロテスタント系の諸国は、大勢からみてどう対応  
したと思うか。

予想

ア、プロテスタント系の国家や諸侯も、重要な宗教日を決  
めるための正確な暦法だと歓迎した。

イ、へたとえ太陽にあざむかれても、ローマ教皇には従わ  
ない!と考えて、この暦法を採用しようとしなかった。

ウ、イのような人々もいたが、一〇〇年もするうちにヨー  
ロッパの大部分の国ではグレゴリオ暦が施行されていた。  
エ、その他。

グレゴリオ十三世の命令と同時にこれに従ったのは、二、三

の地方の例外はあるがまずイタリアで、スペイン・ポルトガ  
ル・ポーランドなどの旧教国は、その年度から採用している。  
フランスでは同年二月一〇日を二〇日として新暦を採用して  
いる。

オランダでは二月二日を一五八三年一月一日として採用  
したが、一般に新教国では、ルターが一五七一年に改革の口火  
を切っていらいかトリックとの対立が激しく、新暦への反対も  
強かった。しかし、徐々に簡便で正確なグレゴリオ暦がとり入  
れられるようになった。

長らく拒んでいたイギリスでも、天文学者たちは不正確な暦  
を使わなければならず、外交や通商などでもまことに面倒であ  
ったので、一七五二年になって採用を決定した。このころには  
グレゴリオ暦との日付のくいちがいはさらに大きくなってお  
り、一七五二年九月二日の次の日を一日としたが、多くの人  
々は「議会が暦から削りおとした十一日分だけ寿命が縮められ  
た」と信じたり、「カトリックの陰謀だ」などと考えて、暴動  
まで起こしている。(日付の変更が、地代・借地契約・為替手  
形・負債の払い戻しなど金銭取引に重大なトラブルをひきおこ  
すことはいうまでもない)。

ドイツでは一七七六年から、スイスでは一八一一年から使わ  
れて、ようやく旧教新教をとわずグレゴリオ暦がヨーロッパで  
広く使われることとなった。

しかし、ロシアやギリシャなどバルカン半島のギリシャ正教  
国ではユリウス暦が使われつづけて、ロシアでは一九一八年ま  
で、ギリシャでは一九二四年まで使われていた。(こういうわ  
けで幕府天文方の役人が幕末に毎年発刊した『万国普通暦』に

上から一般人にもましてそれが必要であった。陰陽暦である當時の天保暦と欧米諸国<sup>(85)</sup>（英・仏・蘭・米・露）使用の太陽暦との対照表が必要であったから、天文方渋川景佑<sup>かげすけ</sup>に命じて「英國航海暦」を翻訳させている。そして天文方渋川は、『万国普通暦』<sup>(86)</sup>を創刊し、一八五四（寛政一）年と翌年に幕府へ献上し、五六年からいご慶応年間まで人はかわりながらも毎年刊行された。

そこで幕末にもなると、洋学者とくに外国人と接触する職務の者は太陽暦を使いだしていた<sup>(87)</sup>。

### 〔問題 12〕

現行の太陽暦（グレゴリオ暦）の原型は、紀元前四六年に採用されたユリウス暦である。

では、紀元前とか紀元後とかいうハキリスト紀元（西暦）√による紀年法は、いつごろ始まったのだろうか。

#### 予想

ア、キリストの活躍していたころか死の直後から。（一世紀ごろ）

イ、『新約聖書』がつくられたころ。（二世紀ごろ）

ウ、ローマ帝国がキリスト教を公認し、やがて国教としたころ。（四世紀ごろ）

エ、ユスティニアヌス帝（Justinianus 在位五二七—五六五）が即位して東ローマ帝国（ビザンティン帝国）が最盛期を迎えるころ。（六世紀）

オ、フランク王国のカール大帝（Karl 在位七六八—八一四）が西ローマ帝国を復興したころ。（八〇〇年ごろ）

カ、十字軍が始まってからのちのこと。（一一世紀以後）

南ロシアのスキティア出のキリスト教の修道士であり年代学者でもあるディオニシウス・エクシグウス（Dionysius Exiguus）は、ローマ教皇の命をうけて『復活の書』を五二五年ごろにあらわした<sup>(88)</sup>。そのなかで彼がはじめてハキリスト紀元（西暦）√をとりいれた。この紀元は、当時キリストが誕生したと考えられていた年を元年としたもので、暦法（ユリウス暦）の変更を含むものではなかった。キリストの誕生日はその頃から一二月二五日と考えられていたが、誕生の年は、実際より四年ほどおくられているらしい。

六世紀に考え出されたこの紀元は、八世紀ごろから普及しはじめ、ヨーロッパの一部の国で正式に採用されたのは一〇世紀に入ってからのことである。

なお、紀元後を意味する A.D. (Anno Domini 神の年) がはじめて使われた例は「A.D. 1219」であり、紀元前（英語でいう B.C. Before Christ フランス語の au J.-C.）は、一八世紀以後になって使われだしたものである<sup>(89)</sup>。

\* \* \*

紀元前一世紀に作られたユリウス暦は、カエサルの子アウグストゥス（Augustus 在位前六三—後一四）が各月の日数を現行のように変更したあと、ニケアの宗教会議（三二五年）の議決によって広くヨーロッパ諸国で使用されることとなった。しかし、ユリウス暦の一年は三六五・二五日で、一太陽年とくらべると〇・〇〇七八日だけ長いため、一六〇〇年間もたつと

最古のものは、一七八九年と新しい)。そして長崎では太陽暦の元旦をオランダ商館にゆかりの人々が招かれて祝ったりしている。

西洋天文学の成果によって暦法を改正しようと考えた八代將軍徳川吉宗は、新しい暦法にもとづく暦の作成と頒布を考え、暦に関する実権を完全に手中におさめようとした。そのため漢訳洋書の輸入をゆるめることにしたが、<sup>(80)</sup>彼が登用しようとした長崎の天文地理学者西川如見は、一七一二年の『天文義論』で太陽暦の紹介を行っていた。実は、鎖国政策が厳しくなった一六八五(貞享二)年以前に入ってきた中国の天文書に、遊子六の『天経或問』がある。これはイエズス会士の天文書の影響をうけて作成されたものであるが、日本でも版を重ねて江戸中期の天文学関係のベスト・セラー<sup>(82)</sup>となっている。同書には、冬至を年初とし一年を三六五日(四年目ごとの閏年には三六六日)とする太陽暦が「天暦」として紹介されていた<sup>(83)</sup>。

『解体新書』いらい蘭学はいよいよ盛んとなっていた。こうしたなかで、暦法の改正をひきつづき考えていた幕府は、オランダ通詞本木良永に『和蘭陀永続暦和解』を作らせて一七八八(天明八)年に提出させており、寛政の改革の推進者である松平定信が暦書の改正をうけついでいった。そして、観測を重んじる高橋至時・間重富らが作製し、西洋天文学をはじめと<sup>(84)</sup>りいたれた椿田運動論による寛政暦が一七九八(寛政十)年に、宝暦暦にかわって使用されることとなった。

杉田玄白と前野良沢に学んだ大槻玄沢は、遊学先の長崎でオランダの新年行事を見聞して江戸へ帰ってきた。そして寛政六(一七九四)年閏十一月十一日がオランダの一七九五年元旦に

あたったので、友人たちを学塾・芝蘭堂に招いて太陽暦の新年を祝っている。「新元会」とか「オランダ正月」というこの会は、玄沢の子・玄幹が死ぬ一八三七(天保八)年まで四四回開かれていく。

こうしたなかで——キリスト教徒以外の日本人の手になる太陽暦刊行の起原は不明だが——一七九五(寛政七)年には、翌年度の太陽暦の試暦として『天文解那物語』が出版された。作者不詳のこの試暦は、「万世劃一暦」といういい方や内容から、遊子六の『天経或問』によったものだと考えられている。(ただし、年初は立春になっている)。

寛政の改革の立役者松平定信が京坂地方を巡視したさい、懷徳堂の中井竹山が諮問に答えて『草茅危言』(一七九一年)を提出した。そこには、改元を一代一号に限った方がよいとか、吉凶などの迷信に関する暦注はすべて削除するようにとの意見がある。その弟で儒者の中井履軒には、『華胥國暦』という一八〇一(享和一)年の太陽暦の試暦があり、そこでは日の吉凶についての暦注をすべて削って、彼岸・八十八夜などの雑節だけに限っている。

一八〇七(文化四)年には一枚摺りの『西洋万代暦』、あいだを置いて開国の前年(一八五七年)には、『安政四年西洋暦』(一枚摺り)、と『西洋略暦』(折り本)が出ている。一八五九年になると、『日月暦』を福田理軒が出版し、まもなくJ・ハーシェル(J. Herschel 一七九二—一八七二)の漢訳の天文書『談天』を翻刻出版している<sup>(84)</sup>。

こうした民間での太陽暦の出版とは別に、一八五三年のペリー(Perry 一七九四—一八五八)来航がこの幕府は、外交政策



らしいの差となり、たとえば冬至が暦の上で二日おくれることとなった。そのうえ度々の日月食が宣明暦による予報とくいちがっていた。

江戸時代に入ると、暦書の研究もさかんとなった。関孝和らも研究した暦書は、中国(元)の「授時暦」であり、渋川春海<sup>はるみ</sup>は、朝鮮(李氏)の天文学者の授時暦研究に助けられて、それに手を加えることに成功した。東西に離れた場所では時刻が異なるという里差(経度差)を彼がはじめて考慮にいれ、マテオ・リッチの世界地図に助けられて北京と京都との里差を割り出したこと、それに日食が見える条件に補正を加えたことが改正の中心であった。これによって最初の日本製の暦法である「貞享暦」が作成された。この暦法は一六八四(貞享一)年に採用とさまり翌年から頒行され、渋川春海は幕府がおいた最初の天文方となった。こうして幕府は暦の編成権も手に入れ、頒暦についても統制することとなった。

\* \* \*

一五四三年にポルトガル船が種子島に漂着して交通が開かれてから、ヨーロッパの文化が日本へ流入してくることになった。彼らが使っていた太陽暦が入ってきたとはっきりわかるのは、F・ザビエル(Xavier 一五〇六―一五五二)が一五四九年に來日してキリスト教を伝道し、人々が宗教日を確定するために暦を利用するようになってからである。キリスト教最大の祭典ともいふべき復活祭は、冬至から立春をへて昼夜の長が同じになる春分をめどに決定される。春分の後の満月につづく最初の日曜日に行われることになっている。

九州の大名たちがローマへ派遣した天正の遣欧使節は、帰国のさい印刷機をもたらし、早速、暦(カレンダリヨ)の印刷も行われたようだ。<sup>(76)</sup> 太陽暦では、一年は一二カ月であり、一年間の日数も月ごとの日数も——四年に一度の閏年のほかは、一定しているので、年間計画をたてるには好都合である。そこでキリスト教が盛んになる一六、一七世紀の交には、宗教面ではいうまでもなく「歳月時節の風儀も……南蛮様を用いさせ尊ませ……百姓耕作の事まで指図をなす」<sup>(77)</sup> ほどになった。しかしながら、やがて本格化するキリシタンへの弾圧と鎖国のために、かつては盛んに使われていたはずの太陽暦も、それを探し出すのが困難な状況になってしまった。<sup>(78)</sup>

#### 〔問題 11〕

キリスト教徒以外の日本人が、太陽暦にもとづく暦を印刷出版するのはいつごろのことか。また、どのような人々が行ったと思うか。

予想

ア、一七七四年に『解体新書』が翻訳出版される以前。  
イ、一七七四年から黒船来航(一八五四年)までの間。  
ウ、一八五四年から開国(一八五八年)までの間。  
エ、一八五八年から明治維新(一八六八年)までの間。  
オ、明治以後。

オランダ東方経営の本拠地ジャワから、毎年長崎の出島の商館へ「咬啗<sup>ジャガタラ</sup>吧暦」といわれた太陽暦が入ってきており、日本の暦と対照した「咬啗<sup>わが</sup>吧暦和解」がつくられていたようだ。<sup>(79)</sup> (現存

ていた律令体制が表わし独占していた「公」(共同利害)なる観念あるいは宗教性は、生きのびて、律令をこえる理念を作り出せないかぎりには人々の意識の底流に祭祀とものにこった<sup>(69)</sup>

\* \* \*

半世紀をこえる南北朝の内乱は、足利義満によって一四世紀の末に統一された。その頃には、武家(幕府・守護)が諸国の軍事・行政はもちろん裁判権をも行使しており、これまで朝廷側が収取していた段銭等も幕府の手で収めて、国家の統治機能を名実ともに幕府が掌握するほどとなった。そうした状況をふまえて、足利義満は、朝廷の機能を太政大臣として掌握し、そのうえ朝廷側の制約から逃れるために出家という方策をとった。さらに、かつての王権がとったように中国(明)へ朝貢し、「日本国王」としての公認された外交上の立場を、中国の年号を使い暦法の導入をも企てながら国内政治に持ち込もうと努めた。<sup>(70)</sup>

それだけに年号についても、鎌倉時代までとはちがっている。たとえば、即位後一六年間も年号をたてられないなど従来の慣例が大きく変化していたり、改元の日程から年号案の選定まで幕府が発言するケースもみられる。兵乱による改元を幕府の側がいい出すケースも多くなったが、改元ではらいをすという考え方に変化はない。

ところで、戦国時代にみられるきわだった特長は、私年号の流行である。数が多いだけでなく、「弥勒<sup>みろく</sup>」「福德」「宝寿」などの改元によって世を変えようとしたものもある。それらは、関東・東北地方での深刻な飢饉の窮状を克服するために、

地方の土豪・国人層あるいは僧侶たちが考えたものであるといわれている。<sup>(71)</sup>

\* \* \*

織田信長・豊臣秀吉のあとをついだ徳川家康は、社会の「共同」機関であった律令による国家体制をひきつぎ、それを封じこめて天下統一を実現するために、次のような方策をたてた。一六〇三年に征夷大將軍に就任し、二年後には秀忠にその職をゆずり渡すとともに、大御所として大坂の陣が終ると、『禁中并公家諸法度<sup>はつと</sup>』(一六一五年)を制定した。そこでは天皇の政治的機能はもろろ宗教的ありようをも統制するために、まず「天子諸芸能之事、第一御学問也」と決めて、さらに親王、公家の座順から衣服なども規定した。そして武家を別格とした官職任命権と、漢朝の年号からよいものをえらべという改元(年号)とだけを残して、他は完全に否定しきろうとした。そのうえ年号の制定なども、幕府(將軍)の内定もしくは承認なしには行えない、という慣行を作りあげていった。<sup>(72)</sup>

その先例となったのが、この法度の公布直前に行われた改元であり、漢の武帝の年号である「慶長<sup>(73)</sup>」から唐の年号である「元和」へと切りかえるものであった。(このあと、正徳・宝暦・天保など中国の年号を借用している)。時には將軍職をうけついでことを直接の理由とする改元も行われているし、年号の公布は、武家庶民には幕府が行なっている。

しかし、暦法については、律令制の崩壊後も九世紀いらいの宣明暦が使われていた。優秀な暦法である宣明暦も一年が太陽年の長さより〇・〇〇二四日長く、八二三年間も使うと二日く

世紀近くになって、本州・九州・四国にまたがる政治的連合体が成立したようで、最終的には近畿地方に本拠をおく政権がそれを実現させた。その間、近畿の王権は外交ルートを確認することによって、国際政治の中心であった中国の王朝から承認をとりつけようと努めてきた。そして、国の内外の勢力に対して中国のもつ政治的（軍事的・経済的）力を活用しながら、政治思想などを含む文化とその担い手たち・鉄資源と技術者たちを確保することに成功した。それらの力によって、地方豪族を従来の支配権を保障しながら、自らの統治機構の一員にむかえられ、豪族間の勢力のバランスをとりながら支配地域を拡大していった。

この政権の中心にあった大王は、<sup>(67)</sup> 連合政権の性格からくる弱点を克服する手段として、儒教仏教による思想の統一と神話（信仰）の統合をすすめ、それをおして官僚体制を整備しようと企てた。この方向は、壬申の乱という内乱をへて確立する。この反乱で、中央政府である近江朝を打ち倒すことができたのは、地方豪族の協力のおかげであったが、彼ら地方豪族たちの組織された実力（集団力）は、天武個人によって代表され、彼らの共同意志の代弁者としての天武を神格化する結果となった。

こうした天武の後継者たちの下で、古代律令制国家は完成期をむかえた。しかし、政治思想や形態は、中国にない神祇官を設けて太政官の上に置いたように、原始的な姿を残している。社会における祭祀の比重の大きさは、仏教を導入しての在来の信仰の補強となり、寺社勢力は、律令とともにこの政権の伴侶となった。（では、律令国家は一般大衆にとってどう映ったか。六九二年からはじめて暦を採用しているが、この儀鳳暦が

正しく適用されていたとすれば、実に四割近くも日食の予報を適中させることができた。<sup>(68)</sup> こうした技術者たちをかかえていた政権なればこそ、ため池づくりなどを含めた社会の共同事務を独占することもできたのだろう。

これいご社会の変動につれて、この政権から経済的・軍事的基盤が失なわれ、さらに法的機能を果たせなくなっても、律令は存続した。そこでこれに代わろうとするどのような政権も、異民族が一挙に征服するといった場合を除いて、かつての全国の統一者の正統な後継者だと自らを位置づけることができなかった。は、私的・地方的な政権にしかすぎず、社会の共同の事務処理機構であるVとの合意をとりつけることはできるはずもなかった。

「律令」の働きはそれだけではなくて、民衆にとっても律令のあらわしたものは大切であった。現在、個人が自らを市民として位置づけることによって個人的利害を公的なものへと変換するように、村落あるいは地域共同体の住民も、自己の立場を律令制下の観念であった「百姓（公民）」として位置づけることによって、要求を貫く（一揆を戦う）ことができた。手工業・商業・文化等にたずさわって農村に影響を与えた人々もまた、地域性の枠組の外あるいは間に立つことが必要だから、守護などの地方政権をこえた朝廷に依存していた。他方、上から地侍層を圧倒しようとする者たちは、自らを「公儀」として位置づけ、戦国大名ともなると分国法をはっして地域住民の丸がかえをはかって、全国統一の足がかりを作ろうとした。

こうして古代の政権から、軍事・経済・法といった機能が現実にはなくなっても、当時の文化レベルをはるかにぬい

のが貞享暦がはじめてという状況もあって、陰陽暦は、まことに理解のむずかしい暦であった。(一年の日数に三五三日から三八五日までの差があったことをみても理解できよう)。

暦とは、全国を統一的に管理する官僚たちのために作成されたものであった。現存している古いものは、いつごろのものであるか。

いずれも正倉院に所蔵されている七四八(天平一八)年二月七日―三月二十九日、七四九年二月六日―四月一日、七五八年歳首―正月二六日・三月三日―四月一八日の三つの暦の断片である。

そこには、毎月の暦日の中段に節氣・上下弦・望など、下段に干支・五行・十二直が示されていて、その日の禁忌・吉凶などが詳細に記入されており、具注暦の名にふさわしいものである。<sup>(63)</sup>

完全にそろった最も古いものは、藤原道長の日記『御堂関白記』(九九八―一〇二一)<sup>(64)</sup>であって、日記は具注暦の余白にかきこまれたものである。<sup>(64)</sup>そしてこれは、毎日の日付のうえに朱で、月火水木金……の七曜が注記されている。キリスト教とともにローマ帝国で定着した週制度が、一〇世紀末には日本に入りこんでいたことがわかる。<sup>(65)</sup>

# 〔問題 10〕

源頼朝が一一九二年に征夷大將軍に就任して、鎌倉幕府が成立した。

では、鎌倉時代には年号制はどうなったと思うか。<sup>(66)</sup>  
予想

ア、幕府は年号を新しく作って全国的に実施させた。  
イ、幕府も新しく年号を作り、幕府の支配する地域では使わせた。しかし、公家の支配する地域では京都の朝廷がきめる年号が使われていた。

ウ、幕府はこれまでの年号制を廃止して中国の年号を採用することにした。

エ、年号は朝廷で決めたが、それに幕府が意見を加えて、公家・武家の別なく使用された。

年号が朝廷で決められることは、鎌倉時代になっても変わらなかったが、幕府が改元の理由や時期などに、直接・間接に介入するケースが多くなり、施行の日も幕府が独自に決めて使い始めるようになった。

もっとも、干支と併記された年号は八皇帝が時間を支配する√という主張のあらわれだから、政府に従わない者は、当然の事ながらその使用を拒むことになる。たとえば、安徳天皇(平清盛の外孫)を拒む源頼朝は、「養和」「寿永」と年号があいついで変ったにもかかわらず、それ以前からの「治承」を使いつづけている。政府への反対がさらに強いと、平安末から鎌倉初期にみられるような私年号があらわれる。また、朝廷が分裂すると、南北朝時代のように複数の年号が生まれて、それぞれの政治勢力に応じて使い分けられたりすることもある。

\* \* \*

日本の統一がいつごろどのような勢力によってなされたかという問題を解くのはとてもむずかしい。しかし、ともかくも五

『源平盛衰記』には「寿永二年閏十月一日、水島ニテ源氏ト平家ト合戦ヲ企ツ、……平氏偽リテ引退。源氏勝ニ乗テ攻カカル、……城ノ中ヨリハ勝鼓ヲ打テ旬リ懸ル程ニ、天俄ニ曇テ、日ノ光モ見エズ、闇ノ夜ノ如クニ成タレバ、源氏ノ軍兵共、日蝕トハ不レ知、イトド東西ヲ失テ、舟ヲ退テ、イツチ共ナク、風ニ随ツテ通行。平氏ノ兵共ハ兼テ知リニケレバ、イヨイヨ時ヲ造リ重テ攻戦。」とある。

鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』とならんで、平安から鎌倉にかけての時代を知るための重要な資料に、その頃の大立物である九条兼実の日記がある。その日記『玉葉(玉海)』は、彼が政務にあつた一一六四年から一二〇〇年にかけての朝儀や政界の実情などの詳細な記録で、適切な論評をまじえながら漢文で書かれている。それに「寿永二年閏十月一日壬戌、天晴、此日日蝕也」とあり、今日は殊に予報の時刻とのずれが大きいので尋ねてみようとのべながらも、四時間に及ぶ日食であつたと書かれている。

『平家物語』は、源氏の側の討手の大将軍らが「小舟に乗て、真前にすすんで戦う程に、いかがりたりけむ、船ふみしづめて皆死にぬ」「源氏の勢、大將軍はうたれぬ、われさきにとぞ落ち行ける」とのべている。こうした狼狽ぶりを説明する一因が日食にあつたと考えてもよからう。<sup>(60)</sup>

現代の天文学者は、ニュートンの力学にもとづく複雑な計算によって正確な結果を手に入れることができる。東京天文台の内田正男氏によると「皆既食ではなかったらしく、午前一〇時に欠け始め、昼直前くらいに金環食またはそれに近い欠け方」で「空の色、地上の様子は一種異様な感じになるので、闇の夜

のごとくというのは大げさであるにしても、源氏の兵たちが恐れおののいたことは充分うなずける」とのべておられる。政権を担当した実績をもつ都の武士(平氏)と義仲軍とのちがいはあざやかである。<sup>(62)</sup>

\* \* \*

月のみちかけの周期を平均して暦を作成する方法(平朔)は、最初の元嘉暦だけであつた。この方法では、月が等速の円運動をするのではないから、朔日にあるはずの日食が二日になつたり、前月の晦日になつたりする。

そこで月と太陽との実際の運動を忠実にあつて実態に近づける暦法(定朔)が、とられるようになった。しかし、そうなると月の大小は極めて複雑になつてくる。

『令義解』や『延喜式』によると、陰陽寮は毎年来年度の暦を造つて、十一月一日に中務省に送り、中務省から直接に奏聞している。そのさい、漆函に納めた天皇用の特製の具注暦と、官庁・国司らに年内に頒布するための筆写された一六六巻の頒暦とが用意され、八時を支配し、人民に時を授ける✓のにふさわしく厳やかな暦奏の儀がとり行われた。

新年度の暦を十一月一日にはじめて頒布するという慣習は、明治までうけつがれていく。この新しい暦をみて、人々は翌年の日数がいくらで、一年は一二ヵ月か一三ヵ月か、閏月は何月か、また各月の大小はどうなっているかなどをはじめて知ることができた。暦法は公開されず、知りえたとしても理解が困難で、そのうえ暦法にもとづかない手直しが加えられるといった事情から、さらには経度の差を考慮して中国の暦法を見直した

けぐあい（食分）が著しくちがったときは、どうしたのだろうか。

それには、△皇帝がすぐれていたので、食から太陽を救えたのだ<sup>(53)</sup>とか、△僧侶の祈祷修法の効果があったからだ、「仏力之靈験」だ<sup>(54)</sup>とかの理由づけもなされ、場合によっては△起こるはずの日食が起こらなかった<sup>(55)</sup>として大赦を出したこともあった。

予報とちがって日食が起こらなかった場合はよいが、予報されずに日食が起こればどうなったのだろうか。△未明の日食だから暦にはのせなかったが、時間がずれたのだ<sup>(56)</sup>などと申しひらきをしたが、いいのがれできない場合には過状をとられたケース<sup>(57)</sup>もあった。そこで予報が適中して禄を与えられた者が、しばらくして失敗をしかすことも起こった<sup>(58)</sup>。

いったい日食の適中率ほどの程度であったのだろうか。

九世紀後半に採用されてから日本で一番長い間使われた宣明暦でみると、およそ三九%にとどまり<sup>(59)</sup>、予報を出しすぎであったこともわかる。

なお、一般大衆にも物忌みをすすめることはありそうだが、それを直接確かめることは筆者にはできなかったため、不明である。

\* \* \*

平安時代も終りに近づく、古代的政権に対して平氏源氏といった武家たちが勃興し、さらにこの両者は激しい戦闘をとおして、やがて源氏が鎌倉に新しい政権を作ることとなった。

#### 〔問題 9〕

一一世紀中頃の保元・平治の乱から、一一八五年に平氏が壇ノ浦で滅亡するまで、源氏内部の権力争いもまじえながら源平の合戦が戦われた。その様子は軍記物語に描かれてくる。

都をおさえた木曾義仲配下の源氏と、都へと向う平家が備中の水島で一一八三年に戦ったとき、△日食がおこった<sup>△</sup>と『源平盛衰記』の「源平水島軍事」は伝えている。

（なお日食のことは『平家物語』の「水嶋合戦」には見えない。）

日食のさい、両軍はどうしたと思うか。A、戦闘を中止した B、戦闘をつづけた C、その他から適切なものをつづえらべ。

予想

Aア、両軍ともに戦闘を中止した。

イ、源氏だけが中止した。

ウ、平氏だけが中止した。

Bエ、両軍ともに日食を事前に知っており、戦闘をつづけた。

オ、源氏は事前に知っていた（作戦に利用した可能性もある）。

カ、平氏は事前に知っていた（同じ）。

Cキ、その他（『平家物語』には見えないので日食の記事は疑わしい）。

太政官に報告し、太政官が諸司に告知することになった。<sup>(46)</sup>『延喜式』

では、日食のときのような措置がとられたと思うか。

予想

ア、屋外に祭壇を設けて、天皇以下百官が太陽をおがんだ。

イ、この機会に日頃の政務を反省し、帳簿類の点検などをおこなった。

ウ、この日に限って、一般国民が中央政府や地方官庁(国衙)に苦情や希望を申したててることを許した。

エ、役所はすべて休みとなった。

オ、一般国民に仕事を休むようにとの命令がでた。

カ、その他。

養老令についての政府の注釈書である『令義解』<sup>りようのぎげ</sup>(八三三年成立)によると、「およそ太陽虧<sup>か</sup>けば、有司〔陰陽寮〕<sup>あうかい</sup>預め奏せよ。皇帝こと視<sup>み</sup>さず。百官おのおの本司を守れ、務を理<sup>おさ</sup>めず、過<sup>す</sup>して乃<sup>いま</sup>し罷<sup>まか</sup>れ」とある。これは唐の制度とほぼ同じで、<sup>(47)</sup>大宝令とは同じであると考えられている。

日食にそなえて、皇帝は政務をとらず(廃朝という)、不吉な太陽の光りにあたらないように、すだれを下し御殿をむしろでおおいかくして内にこもり、僧侶に読経などをさせている。その声のほかはコトリとも音をたてずに静まりかえっていた。『禁秘抄』など。そして官僚たちは、普通その日には出仕せず、その日一日は事務をとらない(廢務という)<sup>(48)</sup>ことになっていたようだ。

つまり当時日食とは、それによってひきおこされると予想された災厄から逃れるために、その日一日は、天皇をふくむすべての役人が政務を全くやめるという大事件であった。そこで皆既日食では、改元の理由ともなり、また大赦をだしたこともあった。<sup>(49)</sup>

御殿をむしろでつつむといったことは、鎌倉時代にも、さらに徳川氏が幕府をひらいたころにも行われていた。ある公家の日記『言経卿記』<sup>ことつねきやうき</sup>には「慶長八年四月一日丁亥、……日蝕ニ付テ、御殿ヲツツミ了、如<sup>おわぬ</sup>例<sup>レ</sup>了<sup>ノ</sup>」とある。

「江戸時代ともなると、日月食は予報できるもので、したがってこれを天変と見る意識はほとんどなくなっている」といわれている。<sup>(50)</sup>

では、大地球形説(地球説)はいうにおよばず太陽中心説(地動説)も拡がりはじめた一九世紀はどうであらうか。ある公家の日記では「文化十二(一八一五)年六月一日乙卯」にも「文化十四年四月一日甲戌」でも同様の記事がみえており、ひっそりとつづけられていたことを示している。

政務が一日中ストップするという大事件である日食が、暦博士の予報にもれていたとなると、災厄を防ぐ措置をあらかじめとることができなかったのだから大問題となる。そこで日食の予報はかなり多めに出版されたらしい。

日食を確認するには、天候に恵まれたりしなければならなし、食の小さいときはさらに確認がむずかしい。そこで、よく見えなかったからとか、時には太陽が西の山に入ってしまったので確認はできなかっただけとかいいわけをしている。<sup>(52)</sup>しかし、明らかに予報とちがって日食が起こらなかったとか、欠

に正六位上をさづけ、「封五十戸、田十町・絶綿布歛」を与えて雑戸の身分から解放した。対馬の国司・郡司らにも同様の措置をとっている。さらに、五瀬を派遣して金を精製させた政界の大立物・大納言大伴御行（すでに同年正月に死亡）を右大臣とし、その子に封百戸・田四十町を与えた。

しかしながら、後に五瀬の詐欺が発露し、大伴御行はだまされていたことがわかったと『続日本紀』は注でのべている。<sup>(39)</sup>（金は、東大寺の大仏鑄造中であつた七四九年になつて「日本ではじめて陸奥国から貢上された」のだから、それまでの間に露見したのだろう）。

そこで、すぐれた精錬技術をもつた三田五瀬は「対馬に金がないことを承知のうえで、右大臣の大伴御行に働きかけ、対馬に派遣してもらつた。そして実際は、対馬の役人たちと共謀して、故国の朝鮮あたりから「金」を仕入れ、それを対馬の「金」と称して貢進した」と所功氏はのべておられる。<sup>(41)</sup>「朝廷では彼（ら）のペテンに気がつかなかつた」ののだろうか。<sup>(42)</sup>

大宝律令の制定と新体制の発足は、祥瑞である「大宝」ぬきには精彩を欠くのでスケジュールにあわせるために、その規模の大きさから考えて、実力者大伴御行らが仕組んだ演出であつたといつてもよからう。なお、五瀬・御行・国司郡司ら関係者が、詐欺律にしたがつて「徒一年」に処せられたり、その子らにひきつがれた特権を奪われたりしたかどうかを伝えていないことも、この判断を支持するのではないだろうか。

祥瑞には、馬のひずめをけずつて牛のように見せかけるなど<sup>(43)</sup>

の偽造もあるし、政權担当者が「神虫」（蚕）が「靈字」を描いたなどと演出のために作りだした場合もあつた。<sup>(44)</sup>

\* \* \*

九七六年の「貞元」（じょうげん・じようがん）改元の理由は、『日本紀略』では「災ならびに地震」（内裏の炎上と山城・近江の大地震）となつてゐるが、『百練抄』では去年七月一日の皆既日食だけを理由にあげている。<sup>(45)</sup>

天変が改元の理由となつたものはかなりあるが、日食によると確認できるのはこれだけのようだ。それにしても日食はこの時代から始まつたものでもなく、この頃から人々の注意をひきだしたのでもないのだから、古代国家の政治体制の移り変わりがわけてくれる。そういえば、災異による改元はこの少し前ごろから定着したのであつた。

ところで、日食の予報はかなりむずかしい。地球からみて月の軌道と太陽の軌道とがびつたりと重なつた場合に日食が起こるが、視差ということがあつて場所によつて起こつたり起こらなかつたりする。そこで、地球全体からいふと数少ない月食の方を見る機会の方が多くなつてゐる。

昔から人々の恐れた日食は、政府お抱えの天文学者である暦博士が担当した。計算で出した日食の予報を暦博士があらかじめ毎年正月一日に陰陽寮に提出し、さらに日食の八日以前に陰陽寮から上級の中務省（儀礼・詔勅・国史などを司どる）に上申するように決められていた。（『延喜式』陰陽）

#### 〔問題 8〕

暦を担当する陰陽寮から日食の予報をうけた中務省は、



オ、その他。

どのような人物(学者)がどんな書物から字句をえらび出し、政府首脳がいかに審議したのかという年号制定の具体的な過程は、平安時代中期いごの儀式書や公家の日記などによく見えだしてくる。それらの実例にもとづいて、七二八年に新設された文章博士たちが用いた出典の種類が推定されている。

法制史家・瀧川政次郎氏は、室町時代の『元秘抄』という写本と帝室博物館長兼宮内省図書頭森林太郎(鵬外)の稿本『元号考』とにもとづいて、八九種の漢籍をあげておられる<sup>(34)</sup>。そのうちで『書経』『易経』『後漢書』『文選』『漢書』などの經書と史書から年号の大部分がとられている<sup>(35)</sup>。これに、天体観測用の器具と天文書や兵書などとともに私有が禁止されていた予言と占いの書(讖緯・陰陽・道家の書)が加わってくる。

日本の場合、同じ年号が重ねて使われたことはないが、それらは日本独自のものばかりかというところではない。さきの『元秘抄』は、大宝・天平・承和・貞観・延喜・承平・貞元・天曆・建武そして当時使われていた文明など二五を、外国と共通のものとしてあげている。

なかには、中国の年号の字「永寿」をさかさまにして、日本の年号「寿永」としたようなケースも数例ある<sup>(36)</sup>。

慶雲・神亀・白鹿・白雉・朱雀・木連理などの珍らしい現象の出現を、中国にならって天下の慶事(祥瑞)と考えたから、政府は発見したり貢献した者に位階をさずけたり物を与えたりしている。法を作って奨励をしている(儀制令)。そのうえ祥瑞による改元が行われると、関係者のみならず民衆とともに喜

びをわかちあうためということで、恩赦を行ったり善行者の表彰・不幸な人々の救済・減税などの処置を行うことがあった<sup>(37)</sup>。

#### 〔問題 7〕

祥瑞による改元は、様々な人々が恩典にあずかれるチャンスであった。祥瑞はいつどこであらわれるかわからないから、でっちあげが行われる可能性もある。

それでは、古代の国家体制がとこの大宝律令が制定された前後五〇年ほどの間では、祥瑞だといって政府をいつわることにはなかっただろうか。

予想

ア、古代の人々は、明るく澄みきった心の持主だから、こうしたサギ行為があるはずがない。

イ、大宝律令制定のころは政治体制が安定していたので、そうした事件は起こっていない。

ウ、刑法にあたる律に祥瑞偽造罪という罰則規定があるが、その頃からこうした行為は防げなかった。

エ、その他。

大宝という年号が制められたいきさつを『続日本紀』はこう伝えている。大宝元(七〇一)年三月甲午条に「対馬島、貢金<sup>ツ</sup>。為<sup>ス</sup>大宝元年<sup>ト</sup>」<sup>(38)</sup>。

政府は銀がでている対馬に目をつけて、六九八年一二月には対馬の金鉞を精鍊させようと計画し、この改元の直後にそのために派遣されて黄金を精鍊した大倭国忍海郡の人、三田首五瀬<sup>(大和)</sup> <sup>みたのおびといつせ</sup>

で、改元という慶事は即位の翌年にすべきだ、という儒教的な考え方にもとづいて、奈良時代に行われていた同年改元が批判された。そして七八二年の「延暦」の改元から、即位の翌年に改元すること(賧年改元)<sup>(30)</sup>となり、平安時代からは中国にならってこれが原則となった。

では、すべての天皇が改元したのかというと、そうではない。奈良時代後半の政争のなかに登場した淳仁(在位七五八―七六四)・朝廷と鎌倉幕府との戦争である承久の乱の仲恭(在位一二二一年四月二〇日―七月九日)は、いずれも廃帝となつてしまったし、徳川幕府の体制が確立した時代の女帝・明正(在位一六二九―四三・第二代将軍秀忠の外孫)も、前代のものをひきついで、新しく年号をたてることはなかった。

(2)から(12)までのめずらしい自然現象や動物・植物・鉱物の出現は、天子たるべき者に対して天が下した吉兆(祥瑞)<sup>(31)</sup>だと考えて、中国で改元の理由としたことがあり、これをまねて日本でも行っている。こうした祥瑞による改元は奈良時代に多い<sup>(31)</sup>

(13)から(14)にみられる災害や異変さらに人災も、天子たる者に対して下した天の戒めとみなして改元の理由となった。災異を避けるためのこうした改元(災異改元)は、九二三年の「延長」から定着し、平安時代いご増加してくる。それに(25)の年のめぐりあわせによる改元がくわわってくる。政治情勢が不安定になるにつれて、辛酉・甲子という特定の年に政治変革が起るVという中国起原の考えが貴族たちをとらえて、政治の変動を避けるための改元が行われた。辛酉の年の改元(革命改元)は九六一年から、甲子の年の改元(革命改元)は三年後の九六四年からそれぞれ定例となつて、江戸時代が終るまでうけつが<sup>(33)</sup>

れていく。

以上のほかに、天皇の個人的な事情などが原因となる改元も行われた。

#### 〔問題 6〕

わずか数年で年号が変更されるとなれば、一切の時間の単位がぶつぶつと切れて、その度ごとに書き改めなければならなくなる。

そのうえ、改元のたびごとに、大化とか大宝という年号の名称の選定が、重要な政治的課題となった。年号の決定にあたっては、文章博士の提案に対して、これまで日本では使われたことはないか・天皇などの贈り名になったことはなかったか・外国の例はとか、「正」という字は「一にして止む」と書くからいけないなどと、政府高官が互いに知恵を尽しあつて厳しい審査が加えられた。

では、文章博士らはその年号案をどのようにして作ったのだろうか。

#### 予想

ア、時代にマッチした政治方針を示す適切な語句を、頭の中から自由に考え出す。

イ、『白氏文集』などの貴族たちに広く親しまれた中国の著作物から、語句をえらび出す。

ウ、『後漢書』や『書経』などの中国のかたい古典からえらび出す。

エ、平安時代いごともなると『万葉集』『日本書紀』など日本の古典からもえらび出してくる。

オ、五〇年

大化から大宝までの半世紀間は、年号が確定しないうえに年号が存在しない期間もあるので、「大宝」いごから近代（「明治」）までをとりあげることにする。その間に使われた年号の数は、二四〇余りになり、そのうちで長く使われた年号は、三年九カ月間の応永（室町時代）、延暦（二三年八カ月、平安時代）、正平（二三年七カ月、南北朝時代）などとなっている。

なお、古代天皇制の黄金時代ともいわれる天平を、天平感宝・天平勝宝・天平宝字・天平神護まで天平で通算すると、三八年間と一番長くなり、その間四代の天皇が即位している。

短かい方をあげると、二カ月余りの暦仁（鎌倉時代）、天平感宝（三カ月）、康元（五カ月余り、鎌倉時代）、八カ月余りには平治（平安時代）と乾元（鎌倉時代）などがあり、一年未満のものが十ある。

では、一年号がどのくらいの期間つかわれたかとなると、平均五年足らずであり、五年にもみまない年号が総数のおよそ七割をしめている。

平安時代と江戸時代とを比較してみよう。平安時代（七九四年―一九二二年）の四一八年間に使われた年号は九一で、一年号平均四・六年間であり、江戸時代（一六〇三年―一八六七年）の二六四年間の年号は三六で、一年号平均七・四年となっている。

〔問題 5〕

年号制定数のチャンピオンをあげると、在位二一年間で八回があり、三六年で八回、九年二カ月で六回などの例があって、年号の総数をふやしている。

では、どのような理由から改元が行われたのだろうか。次にあげる項目について、改元の理由となったことがあると考えられるものには○、どちらともいえないものには△、考えられないものには×をつけよ。

- (1) 天皇の即位 (2) かわった色や形の雲の出現 (3) めずらしい亀の出現 (4) 滝や泉の発見 (5) 白色の鹿の出現 (6) 赤色の雀の発見 (7) 天から甘味のある液がふる (8) 白色の雉の発見 (9) 別々の木がくっついてできた一本の樹の発見 (10) 蚕が文字を作りだす (11) 銅の発見 (12) 金の献上 (13) 日食 (14) 雪星の出現 (15) 地震 (16) 旱魃 (17) 暴風 (18) 洪水 (19) 飢饉 (20) 流行病 (21) 火災 (22) 政変 (23) 兵乱 (24) 外交の困難 (25) 特定の干支の年 (26) 天皇の厄運の年

いずれも改元の理由となったものばかりであり、これらは年号の本来である中国の考え方にもとづいたものである。

皇帝の代がかわると、普通新しい年号をたてることが行われる（代始改元）。では、即位と改元の関係はどうなっているのだろうか。

王位を継承したその年のうちに改元すると、同じ年に二人の君主の年号をもつことになるので「臣子の心」（役人の心情）としても「孝子」（新帝）としてもなんだか都合が悪い。そこ

干支による年次表記が一般的であった<sup>(24)</sup>と判断しておられる。

なお、八一〇年に「弘仁」という年号をたてるさい「難波<sup>(25)</sup>」(孝徳天皇)の御宇、始めて大化の称を頭わす<sup>(26)</sup>」(『日本後紀』)とあり、王位の天智系への復帰という事情がからむにしても、大化という年号は中央政府ですら使うことはなかったといつてよからう。

では、年号の使用を中国にならって義務づけ、政府が公式に使いはじめたのはいつからだろうか。

大宝律令は現存しないが、令<sup>(27)</sup>「一般行政法にあたる」の注釈書などからはほぼ同じ内容だと考えられている養老令(七一一年に藤原不比等が編纂し、七五七年から施行された)によると、儀制令に「およそ公文<sup>(28)</sup>〔公文書〕に年記すべくは、みな年号を用いよ」とあり、命令違反者には律<sup>(29)</sup>「刑法にあたる」で「答五十」の罪に問ひ贖銅五斤を科すとのべて、公文書での使用を強制している。

近江令いらいの政治体験にもとづき、唐の制度にならひながら、律・令ともに備わった大宝律令が七〇一年に制定された。古代律令国家(古代天皇制)の完成をつげる出来事であった。「大宝」という年号が制定された日に、この新しい令にもとづいて官職名と位階制と服制が施行された。これらは、中国、新羅<sup>(30)</sup>をめぐる国際関係のなかで遣唐使の派遣を決定した政府が、壬申の乱(六七二年)いごの政府の安定した立場を改めて内外にむかって宣言したものととれる。

政府の手になる『続日本紀』には「文武天皇五年三月、建元<sup>(31)</sup>、為<sup>(32)</sup>大宝元年」とある。はじめて年号を実施した(建

元)という字句にふさわしい七〇一年の「大宝」こそ、年号制度の法的確立を告げるものでもあった。そのことは前述の藤原京出土の木簡によってもうらづけられることができる。たとえば「己亥年十月 上挾国阿波評松里<sup>(33)</sup>」などと、「上挾国(上総国?)」からの貢進物につけられた荷札には、「己亥年」(六九九年)のように従来からの干支による表記がされているが、七〇二年からは「大宝貳年」などと地方においても年号表示が励行されるようになっていて、国家体制の整備がすすんでいることをうかがわせてくれる。

#### 〔問題 4〕

六四五年の「大化」から始まるといわれる年号制度は、七〇一年の「大宝」でようやく確立した。そしてこれ以後、長い間年号は存続してきた。

A、七〇一年から一八六八年の明治維新までのおよそ一七〇年間に、いくつの年号が政府によって作られたと思うか。(ただし政府が分裂していた南北朝時代は両方の年号を数えるものとする)。

予想

ア、五〇 イ、一〇〇 ウ、二〇〇 エ、三〇〇

オ、四〇〇 カ、その他

B、またその間の年号で、最も長くつづいたものは何年間ぐらい使われたと思うか。(できればその年号の名をかけ)。

予想

ア、一〇年 イ、二〇年 ウ、三〇年 エ、四〇年

にはその寿命は短かったようだ。

### 〔問題 3〕

中国の律令制度にならって、中央集権的な官僚制による支配体制をうちたてようとしたクーデターが、六四五年に中大兄皇子・中臣鎌足らによって決行されたとされている。蘇我氏にかわって政治権力をにぎったグループによって、およそ七五〇年以上も前に中国ではじまり、朝鮮半島の新羅でもすでに始まっていた年号制がとりいれられた。制定された年号の「大化」は、「姦邪去り賢者至りて大化を成す」などの意味で、クーデターの目的を明示し正当化することによって政権への支持をとりつけるためのものでもあったようだ。『日本書紀』によると、六四五年から六五二年まで使われている。

では、「大化」という年号は、どの範囲で使われたと思うか。

#### 予想

ア、役人(貴族)だけでなく、早速一般の人々も利用した。

イ、中央・地方を問わず役人は使った。

ウ、中央政府(朝廷)では使った。

エ、中央政府でも全くといってよいほど使っていない。

オ、その他。

『日本書紀』(孝徳天皇即位前紀)に「天豊財重日足姫(皇極)天皇の四年を改めて、大化元年とす」とある大化という年号が、どの範囲でどの程度使われたのか――、それを確かめる

のは非常に困難である。

八世紀では現存しているすべての文書に年号が使用されているのに、七世紀には資料そのものが絶対的に不足していて、数少ない金石文にも年号の存在を確かめることはできない。中国では早くから数多くの木簡の実物が知られていたが、日本でも一九五五年に平城宮址で木簡が出土し、使用されていたことが始めて確認された。一九六七年度の藤原宮址の発掘調査の結果、ここでも多数の木簡が出土した。しかし、藤原京は六九四年から七一〇年の間の都であり、大化という年号については使用例が知られてはいない。

そこで八世紀はじめに作成され書き写されてきた『風土記』にあたってみよう。『伊勢国風土記』(逸文)には、大化二年の年を「丙午」、『常陸国風土記』には、大化五年を「己酉の年」と、これまで通り干支で表わしている。

『日本書紀』について政府が編纂した『続日本紀』(七九七年成立)を見ると、七五七(天平宝字一)年の太政官から天皇への上奏文(太政官奏)でさえ、大化元年にあたる年を「乙巳以来」とか「乙巳の年」とか表現している。そのうえ、七二四年十月の詔には、「白鳳いらい朱雀以前は、年代玄遠にして尋問すること明らかにし難し」とあり、七三七年三月の太政官奏にも「白鳳の年より淡海の天朝(天智天皇の時代)まで」(類聚三代格)とのべるなど、『日本書紀』には見えなくて「大化」いごに使われたらしい「白鳳」を年号のはじめにあげている。

そこで文部省教科書調査官・所功氏も、大化という年号は地方はいうまでもなく「中央でもあまり使われず、従来どおり

が、実際には元鼎四(前一一六)<sup>(12)</sup>年にはじめて年号を制定し、さかのぼって「建元」いごの年号がつくられたようだ。そしてこの武帝によって一定の方式によって推算された立春を年初とする「太初暦(三統暦)」が、前一一四(太初元)年に採用されて、国家の正式な暦法のはじまりとなった。

では、季節のうつり変りと夜を照らす月とを暦にしていた日本へは、いつごろ暦法が伝来し導入されたのかを『日本書紀』(七二〇年)によって見てみよう。

五五三(欽明天皇十四)年には百済から医・易・暦の博士らを招いて一定期間指導をうけており、翌年には百済から五経博士や僧の他に、交代要員として易・暦・医博士らが到着している。<sup>(14)</sup> 全国を一律に管理するためにはぜひとも暦(年月日)の統一が必要なことはいまでもない。

六〇二(推古七)年には、百済僧顧勒が暦本・天文地理書・遁甲方術書をたずさえて来日したので、渡来系の人々にそれらの技術を修得させている。<sup>(15)</sup> こうして宋が四四五年に施行し百済ではまだ使われていた「元嘉暦」が日本で最初の暦法となった。

(この暦法は平朔で、これ以後のものは定朔である。)

こうしたうえにたって、六〇四年正月から「始めて暦日を用」い、六六七(持統元)年正月に「暦を諸司に頒つ」たと一世紀初めの『政事要略』は伝えている。これらは『日本書紀』には見えないが、六九〇(持統四)年になると、勅で暦法の公式採用を命じている。六九二年からは唐で使用中の「儀鳳暦(麟徳暦)」が用いられ、ついで、唐で三四年間使われて前年には廃された「太衍暦」を七六三(天平宝字三)年に採用した。

平安時代に入った八五八(天安二)年には「五紀暦」、四年後の八六二(貞観四)年には「宣明暦」が採用されている。宣明暦は、これ以後江戸時代の一六八四(貞享元)年まで八二三年の間使用されることとなった。

#### 〔問題 2〕

年号制は紀元前二世紀に中国(漢)で始まり、二〇世紀のはじめにアジアで最初の共和国である中華民国が成立するまで、中国では存続した。紀元前一四〇年から一九一一年までのおよそ二〇〇〇年の間に、中国の時の政府(皇帝)が作った年号の数は、いくつぐらいあると思うか。

予想

- |         |         |
|---------|---------|
| ア、一〇〇以下 | イ、二〇〇   |
| ウ、三〇〇   | エ、四〇〇   |
| オ、五〇〇   | カ、六〇〇以上 |

中国ではしばしば王朝が交代し、しかも同時に二つ以上の政権が存在したこともある。<sup>(16)</sup> それだけに研究者によってとりあげる年号の数にちがいがあがあるが、正統王朝のものといわれるのがおよそ四五〇余りで、これにせまい地域しか統治できなかった国家の年号三〇〇弱を加えると七五〇前後となる。さらに王朝交代のさいに群雄たちが建てた年号をあわせると、総数は八〇〇をはるかにこえることになる。

一つの年号がつづく期間は、正統国家でも皇帝一代の改元数が二回強だから、平均すると五年余りとなる。例外はあるが、政権が比較的安定した時代は年号が長く続き、分裂抗争の時代

さい彼らは国書をたずさえていったのだろうが、実体は不明である。五世紀になると、倭王武がたずさえていったと思われる漢文の上表文が『宋書』に見える(四七八年)。(6)

日本国内で発見される鏡に文字の鋳られたものもあるが、その意味を理解し記録するために使用したことがはっきりとわかる例は、ようやくこの頃からのことである。和歌山県の隅田八幡神社がよく知られている銅鏡を所蔵している。その背面にある文様の外縁に「癸未年八月……」という銘文があり、「癸未」という干支と「八月」という中国風の月の表わし方が見えている。(7) 渡来系の技術者が製作したこの鏡の年代は、干支が六〇年で一巡するから確定できず四四三年あるいは五〇三年とされている。こういう癸未という年は、面白いことに・あるいは当然のことながら本家の中国でも、それをうけいれた朝鮮の諸国や日本でも同じ年を表わしている。(日付の干支も中国文化圏では古くから一致しているといわれている)。

干支は循環するが、多くの地域や民族にまたがった事柄を整理し長期間の記録をとるには、ある特定の年を起点として連続して年数を数えることが必要となる。(こうした方法を紀年法という)。

かつて世界中の多くの国々では、政治的組織体である国家の支配者が権力を奪取もしくは継承したさい、その時あるいは年からは起算する方法がとられて在位年数で表わしてきた。中国でも干支に加えて、紀元前八四一年(周代)から確実にそうした方法がとられている。(8) その頃から王は、毎月の始まりを宮中で宣言(告朔)し、閏月には城門に出向いてそれを告げていたともいわれている。(9)

ところが周の終りから春秋戦国という天下大動乱の時期に入ると、暦を作成して全国に頒布させる実力をもった政権がなくなったので、統一された暦というものはなくなってしまった。

紀元前二二一年に中国を統一した秦の始皇帝は、君主独裁の中央集権体制を実現するため、官制をととのえ郡県制を実施し、文字や貨幣の統一などを強力におしすすめた。しかし、暦法については、とりあえずこの戦国時代に生まれた陰陽五行説をとりいれて「十月を正月とし、黒い色を尊ぶ」こととした。(10) そこでもともと純粹な天文計算である暦法のなかに五行説がとり入れられて、新しい王朝が成立すると、新しい暦を作り「正朔を定めて公布する」とともに、「礼服の色を改める」という先例をひらくこととなった。(11)

天命をうけた皇帝は、八空間をみだすすべての人および物を所有し支配するだけではなく、時間の運行をも支配するVという政治思想のもとにあって、改暦とは八王者が新しく天命をうけたことVを人々に知らせて自らの立場を権威づけるまたとなない手段であり、また、その暦(法)をいかにして周辺の国々に採用させるかが政治的課題ともなっていた。こうしたことも、中国の暦法の数が多い理由となっている。

短命に終わった秦のあとを漢がうけつぎ、六代目の武帝は治世の途中で改めて元年をたて(改元)、自己の支配する年に名称を与えするという年号制(元号制)を採用した。中央集権体制を確立した武帝は、神仙術の方士をも近づけ、当時の流行の八天子たるべき者にたいして天は瑞祥をくだすVという説をとりいれることとした。その年号は、紀元前一四〇年にはじまる「建元」から「元光」「元朔」「元狩」「元鼎」などとなっている

ようもなかった。

そのうえ、今日ではケプラーの法則として明らかたように、太陽と月の動きは円軌道を描かず等速度で動くわけでもないの  
で、平朔という方法では正確な暦とならず日月の運行にあわせ  
た新しい陰陽暦をつくることとなった。

しかし、実態にあわせて暦をつくる定朔<sup>ていきき</sup>という方法は、非常  
に困難な仕事をともなった。長期にわたる正確な観測をおこな  
い、そのデータにあうように太陽や月の運行の関係式を作り  
だすという複雑な計算が必要であったからだ。そして、この計  
算にもとづいて日食が朔<sup>ついち</sup>(一日)に起こり、望<sup>ぼう</sup>(満月)に月食  
となるように暦が作成され、食の日付や時刻・食の大きさなど  
の予報と実際とが一致するかどうかで暦法の判定をしながら、  
その改良がおし進められてきた。

こういう事情もあって、漢の武帝が暦法  
を採用してから二〇〇〇年余りの間に、中  
国では実に四〇数回の改暦が行われてき  
た。そして平素は、その暦法にもとづいて、  
観測結果と照しあわせながら毎年の暦を作  
成するのが政府お抱え<sup>かか</sup>のプロの天文学者た  
ちの仕事であった。(陰陽暦では、ひと月  
の日数は二九日か三〇日であるが、一年間  
の日数は、日本の場合では平年で三五三  
三五五日、閏年で三八三―三八五日とさま  
ざまになっていた)<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>  
下に中山茂氏が作成された「中国と日本  
の改暦頻度」をかがけておく。

中国	改暦年	改暦年	暦法	時代
前漢				B.C.
後漢				A.D. 100
				200
				300
六朝	445			400
隋		604?	元嘉	600
		692?	儀鳳(麟徳)	700
唐	665		飛鳥	700
	729		奈良	800
	762	764	大衍	800
	822	858	五紀	900
五代		862	宣明	900
				1000
宋			藤原	1100
				1200
授時			鎌倉	1300
元				1400
			室町	1500
明				1600
		1685	貞享	1700
		1755	宝暦	1800
		1798	寛政	1800
		1843	天保	1800
清		1872	グレゴリオ	1900
			明治	1900

日本はいうまでもなく漢字文化圏つまり中国文化圏に属して  
いるが、干支による年月日の表わし方はいづごろから入ってき  
たのだろうか。

紀元前三世紀ごろに大陸から伝わってきた稲作と金属器など  
によって、日本の社会が大きく変貌していく様子は、ようやく  
紀元前後あたりから記録(中国の史書)を通して、かいま見るこ  
とができる。成立してきた数多くの国家とその王たちが征服・  
統一戦争を戦いながら、中国王朝への朝貢を通して国の内外に  
わたる軍事的経済的基盤を拡充させようとしている。西暦五七  
年には「倭奴国王」が後漢の光武帝から、三世紀になると女王  
卑弥呼が魏の国王から印綬を与えられているが見える。その



きていた。

ところで現行の太陽暦の起原は、ユリウス・カエサル（シーザー）（Caesar 前一〇二—四四）が紀元前四六年に採用したユリウス暦である。もともと古代ローマの暦は、月のみちかけだけによって作られた太陰暦であったが、エジプトのすぐれた暦を知った彼は、アレクサンドリアの天文家ソシゲネスをローマ暦改正の最高顧問に任命した。そして、恒星に対する太陽の位置を規準として一年の長さを三六五・二五日とし、平年を三六五日、四年目ごとに三六六日の閏年うるしどしをおく純粋な太陽暦を制定した。<sup>(2)</sup> それ以来、ローマ帝国の正式の暦としてヨーロッパ・アフリカ・アジアにまたがる広い地域で長い期間使われることになった。その間、キリスト教がローマ帝国に広がるにつれて、もともとなかった週の制度（日・月・火・水・木・金・土の七曜）がコンスタンティヌス帝（Constantinus I 二七四頃—三三七）によって西暦三二一年に導入され、ユリウス暦と週の制度（七曜）とは不可分のものとなった。

しかし、ユリウス暦の一年の長さは、一太陽年にくらべて〇・〇〇七八日（約一〇分五八秒）長かったので、一六世紀になってローマ教皇グレゴリオ十三世（Gregorius XIII 在位一五七二—八五）が閏年のおき方を改正した。こうして改暦された太陽暦（グレゴリオ暦）を現在の私たちは使っている。

もっとも、今でも太陰暦がイスラム教の世界の一部では使われている。<sup>(3)</sup> 教祖マホメットがメッカからメジナへと逃れた西暦六二二年七月一六日を紀元とするイスラム暦（マホメット教暦）は、比較的最近になって制定された宗教暦である。しかし、季節の予報、したがって農業には役立たないので、農耕民のため

には別にイスラム太陽暦が作られている。

#### 〔問題 1〕

日本や中国はもちろんのこと、世界中のほとんどの国で太陽暦が使われている。この暦法は、紀元前四六年にカエサルが制定したものをもとにして、一六世紀になって一度修正が加えられたものである。

中国では、漢の武帝が紀元前一〇四年に暦法を定めてから、中華民国が一九一二年に太陽暦を採用するまで二〇〇〇年余りの間、陰陽暦が使われていた。ではその間に時の政府が暦を作成するために採用した暦法は、いくつくらいあるのだろうか。

#### 予想

ア、五つ以下      イ、一〇くらい  
ウ、一五くらい      エ、二〇くらい  
オ、その他

陰陽暦が最もよく発達した中国では、すでに殷代からこの暦が使われていたことがわかっており、日本の暦法も中国で発達してきた天文学の暦法にならったものであった。さて月のみちかけの周期は、平均すると二九・五日強となるので、これをもとに暦をつくる方法（平朔へいさく）が生まれた。二九日の月（小の月）と三〇日の月（大の月）とを六カ月ずつ組みあわせればよいのだが、一二月つまり一年は三五四日強となつて一太陽年の長さには一日ほど不足することとなる。ここで二三年ごとに一三カ月の年（閏年）をおいて調節したが、季節のずれは避け

## 日本の暦法と年号制

幸 田 正 孝

(昭和五十七年四月三十日)

一九六三年に国立教育研究所の板倉聖宣氏（きのこのぶ）が「仮説実験授業」を提唱され、それらしい科学教育の変革が始まった、と筆者は考えている。「科学的認識は社会的認識である」ということを意図的にとらえて作成したこの小論は、サークル・クラスなどグループでの討論を積極的に想定したものである。

なお、「暦と習俗」および「社会の変革と暦——神武紀元をめぐって——」については、なるべく言及をひかえた。前者は知人らが計画中であり、後者については別の機会に論じる予定である。

拙論が「授業書」の試案としての役割を果たすことができればと念じている。

小さな集団を単位とした人々の生活が多様化し、他の集団との交渉が盛んになるにつれて、時間の流れをはかる単位が一層必要とされてくる。昼と夜とのくり返しではかられる一日をもとにして、一方ではそれを分割する時刻法も発達するし、他方ではもっと長い時間をはかるメジャーが求められてくる。そこで自然の世界にある時計として、二九〇三〇日かかって規則正しくみちかけする月を見つけて、一月・二月といった月の単位

がこしらえられたりする。しかし、農業がはじまった大河の流域では、季節による河川の氾濫があったり、洪水の防止や灌漑のために、また、種まきや収穫を遅くもなく早くもなく適切にやるには、季節の到来を正確に知ることが必要であった。そこで、春分と秋分、あるいは冬至と夏至などによって一年という単位が見つけだされてきた。

暦には、太陽の周期だけにとづく太陽暦と、月の周期にもとづく太陰暦と、両者を考えあわせた太陰太陽暦（陰陽暦）とがある。

中国で生まれた十干十二支は、西暦紀元前一四〇〇年頃（殷代）から亀甲や獣骨などに刻まれて発見されてくる。十干は十進法から、十二支は一年間のおよその月数からきていると考えられているが、この両者をくみあわせた干支は、もともと日数を数えるために使われたものである。ずっと後になると、年を数えるためにも使われだして、たとえば今日でも私たちが「一九八二年はイヌ年だ」といったぐあい用いたりすることもある。十二支を動物名でよんで年をあらわす使い方は、ずっと新しく漢代（紀元前二〇〇年頃）になってから始まったといわれている。<sup>(1)</sup>

この年という単位は、一太陽年ではおよそ三六五四分の一であり、すでに西暦前五世紀の戦国時代には知られており「四分暦」で使われていた。しかし、一太陽年だけでは、時間の単位としては余りにも間があきすぎるので、朔（新月）・上弦・望（満月）・下弦というほぼ七日を単位とするサイクルや、夜間の明りともなり潮の干満と関係がある月（太陰）とを併用した陰陽暦が作られてきた。中国も日本も長らくこの暦を使って